

# 那珂 6

—第18・28・30・31次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第292集

1992

福岡市教育委員会

# 那珂 6

—第18・28・30・31次調査報告—  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第292集



1992

福岡市教育委員会

## 序

古くから大陸文化受窓の門戸として栄えてきた福岡市内には多くの埋蔵文化財が分布しています。本市では、特に文化財の保護、活用に努めてきていますが、市内の都市整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書は、博多区那珂・東光寺町内に所在する那珂遺跡群内で、開発に先立った発掘調査を実施しました那珂遺跡群第18・28・30・31次調査の報告書です。

発掘調査の結果、各調査で弥生時代から近世にかけての遺構が検出され、貴重な資料を得ることができました。

富士開発株式会社、株式会社西日本住センター、広田信一氏、西田浩三氏、西田孝子氏をはじめとする関係各位のご協力に対し感謝の意を表しますとともに、本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

## 例　　言

1. 本書は、下記の開発に伴う事前調査として福岡市教育委員会埋蔵文化財課が発掘調査を実施した那珂遺跡群の調査報告書である。

調査次数	所 在 地	地 権 者	調査原因	調査期間
第18次	博多区東光寺町一丁目23-5	富士開発株式会社	社屋建設	1989年1月25日～ 1989年2月14日
第28次	博多区東光寺町309・312～ 314番地	株式会社 西日本住センター	共同住宅建設	1990年5月10日～ 1990年6月9日
第30次	博多区那珂一丁目462-1	広田信一	店舗建設	1990年12月2日～ 1990年12月17日
第31次	博多区那珂沼口802-1・15	西田孝子・西田治三	共同住宅建設	1990年12月17日～ 1991年1月31日

2. 本書使用の遺構実測図は、第18次調査は山口謙治外、第28次調査は佐藤一郎、第30・31次調査は常松幹雄があたった。
3. 本書使用の遺物実測図は、第18次調査出土遺物のうち、土器を浜石正子、他の遺物を山口が、第28次調査出土遺物は佐藤が、第30・31次調査は古川千賀子があたった。
4. 本書に使用した写真是、第18次調査の遺構は山口、遺物は平川敬治、第28次調査は佐藤が、第30・31次調査は常松・古川があたった。
5. 本書使用の図面の整図は、第18次調査は主として山口朱美が、第28次調査は佐藤が、第30・31次調査は常松・古川が行なった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 本書は第1章が第18次調査、第2章が第28次調査、第3章が第30次調査、第4章が第31次調査を収録した。
8. 本書の執筆・編集は、第1章を山口謙治、第2章を佐藤一郎、第3・4章を常松幹雄・古川千賀子があたった。
9. 本書収録の各調査出土遺物・記録類については、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開して活用していく。

# 本文目次

第1章 第18次調査報告	（山口謙治）	1
I 序説		
1. はじめに		2
2. 調査の組織		2
3. 第18次調査地点の位置		3
II 調査の記録		
1. 調査の概要		5
2. 積穴住居址 (SC) と出土遺物		6
3. 掘立柱建物 (SB)		15
4. 第1号溝 (SD-01) と出土遺物		18
5. その他の遺構と出土遺物		33
III まとめ		34
第2章 第28次調査報告	（佐藤一郎）	39
I はじめに		
1. 調査に至る経過		40
2. 調査の組織		40
II 発掘調査の概要		40
III 遺構と遺物		
1. 検出遺構		42
2. 出土遺物		44
IV 小結		44
第3章 第30次調査報告	（常松幹雄・古川千賀子）	49
I 序説		
II 調査の概要		51
III 小結		62
第4章 第31次調査報告	（常松幹雄・古川千賀子）	67
I 序説		
II 調査の概要		69
III 小結		77

# 挿 図 目 次

Fig. 1 那珂遺跡群調査地点位置図	
Fig. 1-2 那珂遺跡群第18次調査地点地形実測図および遺構分布図	4
Fig. 1-3 壺穴住居址分布図	6
Fig. 1-4 第2・5号壺穴住居址実測図	7
Fig. 1-5 第6・23号壺穴住居址実測図	8
Fig. 1-6 第21号壺穴住居址実測図	9
Fig. 1-7 第5・21号壺穴住居址出土遺物実測図	10
Fig. 1-8 第4号壺穴住居址実測図	11
Fig. 1-9 第4号壺穴住居址出土遺物実測図	12
Fig. 1-10 握立柱建物分布図	13
Fig. 1-11 第11号握立柱建物実測図	14
Fig. 1-12 第12号握立柱建物実測図	15
Fig. 1-13 第13号握立柱建物実測図	16
Fig. 1-14 第14号握立柱建物実測図	16
Fig. 1-15 第15・16号握立柱建物実測図	17
Fig. 1-16 第1号溝土層断面図	19
Fig. 1-17 第1号溝出土土器実測図(1)	20
Fig. 1-18 第1号溝出土土器実測図(2)	21
Fig. 1-19 第1号溝出土土器実測図(3)	22
Fig. 1-20 第1号溝出土土器実測図(4)	24
Fig. 1-21 第1号溝出土土器実測図(5)	25
Fig. 1-22 第1号溝出土土器実測図(6)	26
Fig. 1-23 第1号溝出土土器実測図(7)	27
Fig. 1-24 第1号溝出土土器実測図(8)	28
Fig. 1-25 第1号溝出土土器実測図(9)	29
Fig. 1-26 第1号溝出土土器実測図(10)	30
Fig. 1-27 第1号溝出土土器実測図(10)	31
Fig. 1-28 山上金属器実測図	32
Fig. 1-29 出土石器・土製品実測図	33
Fig. 1-30 出土ナイフ形石器実測図	33
Fig. 2-1 那珂遺跡群第28次調査地点位置図	41
Fig. 2-2 那珂遺跡群第28次調査遺構配図	42
Fig. 2-3 地下式土壤実測図	43
Fig. 2-4 溝土層断面図	43
Fig. 2-5 出土遺物実測図	44
Fig. 3-1 第30次調査地点遺構配図	51
Fig. 3-2 調査区と那珂八幡古墳との位置関係	52
Fig. 3-3 握立柱建物(SR-01)実測図	54
Fig. 3-4 杖穴(SP-08)実測図と出土遺物	55
Fig. 3-5 第1・2号井戸実測図	56
Fig. 3-6 第1・2号井戸出土遺物実測図	57
Fig. 3-7 第1号土壙墓実測図	58
Fig. 3-8 第1号土壙墓出土遺物実測図	59
Fig. 3-9 SX-01実測図	60
Fig. 3-10 SX-01出土遺物実測図	61
Fig. 3-11 その他の遺物実測図	62
Fig. 3-12 粘土帯塗の比較(1.那珂第30次 2~4.勒島第8号住居址IV層)	62
Fig. 4-1 第31次調査地点遺構配図	69
Fig. 4-2 那珂遺跡群第31次調査区位置図	70
Fig. 4-3 第1号壙棺墓および塗実測図	71
Fig. 4-4 第1・2号木棺墓実測図および第1号木棺墓崩落小森実測図	72
Fig. 4-5 第1・2・3号住居跡実測図	74
Fig. 4-6 住居跡出土土器実測図	75
Fig. 4-7 遺物包含層ほか出土遺物実測図	76
Fig. 4-8 那珂沼口遺跡出土第1・2号壙棺実測図	77

## 図 版 目 次

PL. 1	1) 第18次調査全景（北東から）	35	PL. 8	1) 第30次調査区全景（南より）	63
	2) 穴住居址建物分布状況	35		2) 掘立柱廻り方（SP-08）（東より）	
PL. 2	1) 第21号竪穴住居址完掘状況	36		.....	63
	2) 第23号竪穴住居址完掘状況	36	PL. 9	1) 土壙墓（SK-01）（南西より）	64
	3) 第6号竪穴住居址完掘状況	36		2) 土壙墓（SK-01）（南東より）	64
	4) 掘立柱建物群分布状況	36	PL. 10	1) 第1号井戸（SE-01）（南より）	65
	5) 第11号掘立柱建物検出状況	36		2) 性格不明遺構（SX-01）遺物出土状況	
	6) 第12号掘立柱建物検出状況	36		（東より）	65
PL. 3	1) 第1号溝完掘状況	37	PL. 11	第30次調査出土遺物	66
	2) 第1号溝遺物出土状況	37	PL. 12	1) 第31次調査区より西側をのぞむ	78
	3) 第1号溝出土土窓形土器	37		2) 発掘作業風景	78
PL. 4	第1号調出土土器	38	PL. 13	1) 第1号木棺墓（南より）	79
PL. 5	1) 調査区西半部（西から）	46		2) 第2号木棺墓（南より）	79
	2) 調査区西半部（南から）	46	PL. 14	1) 第31次調査区全景1（南より）	80
PL. 6	1) 第3号地下式土壙（南から）	47		2) 第31次調査区全景2（南より）	80
	2) 調査区東半部（南から）	47	PL. 15	1) 焼失住居（SC-03）（南より）	81
PL. 7	1) 調査区東半部（北から）	48		2) 発掘参加者	81
	2) 調査区出土遺物	48	PL. 16	第31次調査出土遺物	82

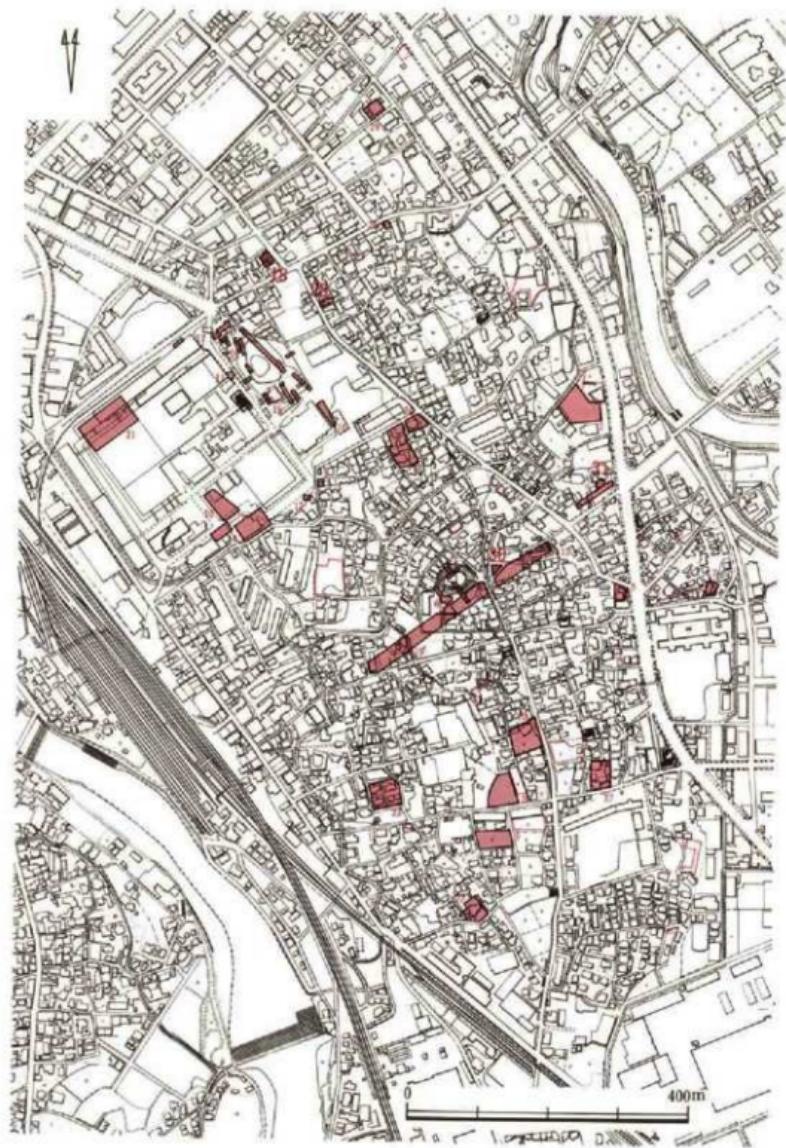
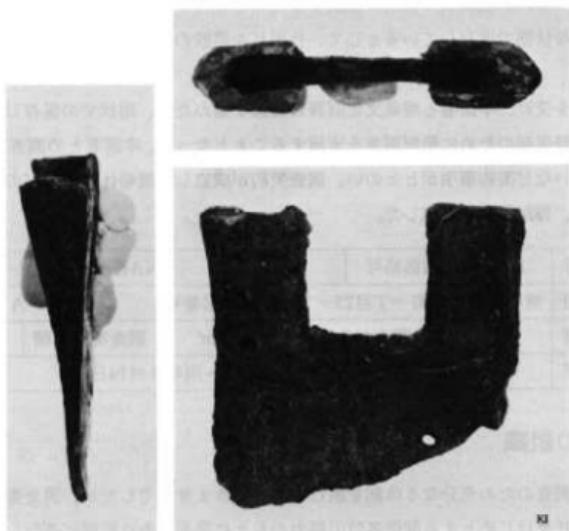


Fig. 1 那珂遺跡群調査地点位置図

## 第1章 第18次調查報告



第1号窯出土青銅製器先

## I 序 説

### 1. はじめに

博多区東光寺町一丁目地内に、富士開発株式会社の社屋ビル建設が計画され、富士開発株式会社より社屋ビル建設に伴う埋蔵文化財事前審査願書が申請された。この申請を受けて埋蔵文化財課は踏査および試掘調査を実施した。その結果、地表下10cm前後で弥生時代から古墳時代の遺物とともに溝や柱穴などの遺構が検出できた。申請地は周知の遺跡であるところの那珂遺跡群に含まれており、同遺跡群のなかでも山地形が残っており、遺構の遺存状態が良好であると考えられること、試掘調査で遺構が確認できたことなどから、埋蔵文化財課は、申請地全域に遺構が良好な状態で遺存しているとして、社屋ビル建設の計画変更による保存が必要であると決定した。

以上の決定を受け、申請者と埋蔵文化財課は協議を重ねたが、現状での保存は困難であり、止むをえず記録保存のために発掘調査を実施することになった。申請者との調査費、調査期間、出土遺物の扱いなど契約事項がととのい、調査契約が成立し、現場休憩所などの附帯条件がととのったあと、発掘調査を実施した。

遺跡調査番号	8855	遺跡略号	NAK-18		
調査地地籍	博多区東光寺町一丁目23-5		分布地図番号	037-A-3	
開発面積	473m <sup>2</sup>	調査対象面積	473m <sup>2</sup>	調査実施面積	415m <sup>2</sup>
調査期間	1989年1月25日～同年3月14日				

### 2. 調査の組織

緊急の事前調査のため充分なる体制を組むことができませんでしたが、調査委託者である富士開発株式会社をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査は順調に進行しました。なお、整理報告作業は、担当者である山口の業務繁多から3ヶ月に渡ってしまいました。富士開発株式会社をはじめとする関係各位の協力に対し感謝するとともに、お詫び申し上げます。また、厳冬の雪、雨のなかでの調査にもかかわらず発掘調査に従事してくださいました作業員の方々にお礼申し上げます。

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

教育長 佐藤善郎(前任) 井上雄哉 前文化部長 川崎賢治

文化財部長 花田兎一 埋蔵文化財課長 柳田純孝(前任) 折尾学

第2係長 飛高憲雄(前任) 塩屋勝利

調査担当 山口謙治 庶務担当 松延好文(前任) 中山昭則 吉田麻由美  
調査(整理)補助員 平川敬治 浜石正子

調査・整理作業協力者 松本直子(九州大学) 石田晴美 尾崎君枝 甲斐田嘉子 神谷玲子  
小森佐和子 坂井昭美 土妻崎つや子 平野徳子 藤野洋子 星子輝美 堀苑京美  
山口朱美 山崎美枝子

### 3. 第18次調査地点の位置 (Fig. 1)

本調査地は、那珂・比恵遺跡群が所在している中位段丘の那珂・比恵台地のほぼ中央部に位置している。那珂遺跡群のなかでみていくと北部にあたる。本調査地周辺は削平を受けて市街化しており、標高8m前後であるが、本調査地は標高が8.9mあり、那珂・比恵遺跡群のなかでは点的に旧地形が遺存している。

本調査地は、現在地籍では博多区東光寺町一丁目23-5で、国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から20.9cm、東から12.2cmにあたる。

本調査地周辺の調査も近年、10ヶ所前後の調査が実施されている。本調査地の南150mに前方後円墳である刺塚1・2号墳があり、本書収録の第28次調査地は、南南東100mに位置している。また、「那珂5」報告の第10~12・14~17・21次調査地は、南西300m前後に位置している。



第18次調査地点 全景 (北から)

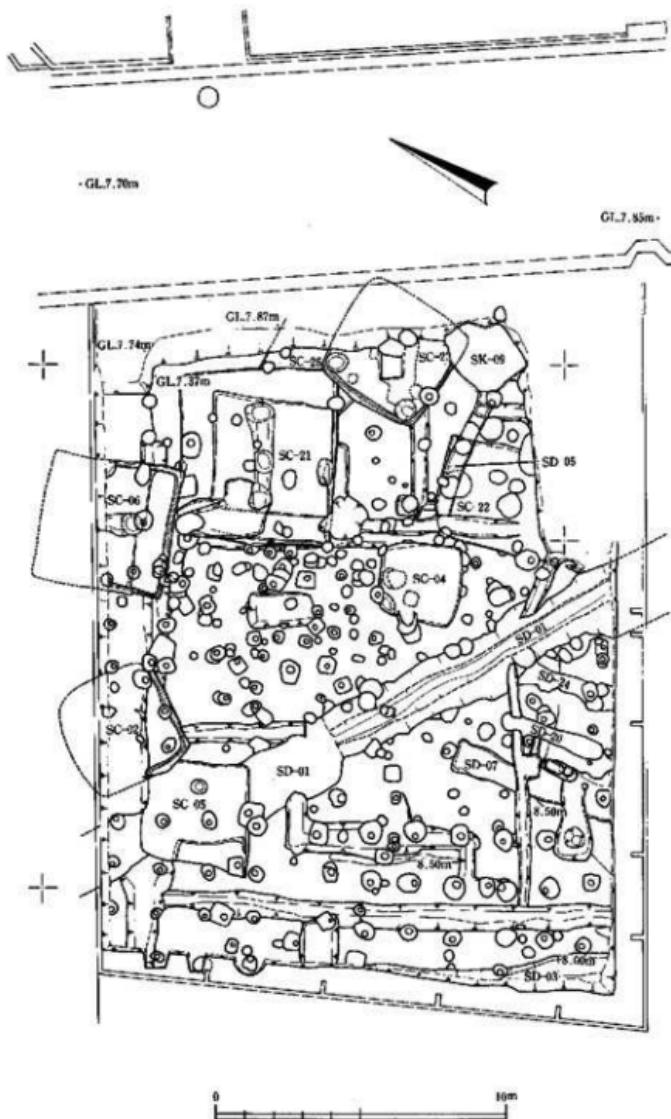


Fig. 1-2 那珂遺跡群第18次調査地点地形実測図および遺構分布図

## II 調査の記録

### 1. 調査の概要 (Fig. 1-2、PL. 1)

本調査地は前述したように、削平を受けている那珂・比恵遺跡のなかでは点的に旧地形を保っており、標高は8.9m前後である。調査前は畠地として利用されており、表面で弥生時代から中世の遺物を採集することができ、これまでの周辺地の調査からも弥生時代から中世の遺構の存在が予想された。さらに試掘調査からも、全域に各時代の遺構が分布していると考えられた。以上の結果を受け、調査は対象地全域を可能な限り行なうこととした。調査対象地は、北東側に幅7mの道路があり、北西側は社屋、南西・南東側は民家に囲まれ、方形の形をしている。対象地の東隅は車庫がわりとして使用されていたため、10m弱×4mで道路面まで削平を受けていたので、ここに休憩所としてユニットハウス(1×2間)を設置し、調査区から除いた。また、南西・南東側は民家との境界に2m弱の高さをもつブロック塀があり、それぞれ1m前後の引きを取り、調査区を設定した。

調査は設定期間が1ヶ月間であり、遺構面が複数ある複合遺跡であると考えられること、遺構の遺存が良好であると考えられることなどから、古代以前の遺構の調査に主眼を置き、耕作土除去に重機を使用し、廃土を搬出することから始めた。その結果、地表下10cm前後で中世(13世紀前後)の面が検出できたが、遺構の調査に主眼を置くことから、標高8.5m前後の鳥栖ロームが検出できるまで耕作土および中世包含層である暗灰色土層までを除去した。

検出遺構として、竪穴住居址・掘立柱建物・溝・柱穴がある。遺構は遺構記号を使用し、竪穴住居址をSC、掘立柱建物をSB、溝をSD、土壤をSK、柱穴をSPとした。なお、検出遺構は検出順に遺構記号の後に通し番号を付した(例: SD-01・SC-02……SK-09……SB-11……)。柱穴は建物としてまとまったものに対しては、遺構記号の後に遺構番号、その後に2桁の通し番号を付した(SB-1101~1115)。なお、建物としてまとめることができなかった柱穴は、遺構記号の後に4桁の通し番号を付した(例: SP-0001……)。なお、本書のなかでは、可能な限り併記していく。

出土遺物は、弥生時代中期後半から終末期の甕・壺などの土器、石庖丁などの石器、鉄斧などの鉄器、青銅製鋸先、古墳時代から古代の須恵器・土師器・鉄器などがある。出土遺物については、遺跡番号の後に5桁の通し番号を付し、登録番号とした。金属器を885500001から、石器・土製品を885500011から、土器を885500051から実測したものに付し、未実測分については、遺構ごと、量が多い場合はコンテナごとに登録番号を付した。なお、本書のなかでは竪穴住居址出土遺物、溝出土遺物、本調査出土土器、金属器、それぞれ通し番号を付して使用している。

本調査地は予想にたがわず、遺構の遺存状態も良く、しかも対象地全域に分布していた。当初の調査期間である1ヶ月間では調査を完結することができなかつたので、地権者の協力により2週間調査を延長し、最低限の記録保存の調査を実施した。したがって、第1号溝は完掘しておらず、対象地のなかで約1/3は遺存している。

## 2. 壺穴住居址 (SC) と出土遺物 (Fig. 1-3, PL. 1)

本調査地では、SC-02・04・06・21～23・26の8基の壺穴住居址（以下、住居址とする）を検出した。8基の住居址はいずれも平面形方形で、遺存状態はSC-04・23を除いて悪い。住居址からは

SC-04  
で比較的  
まとまっ  
た遺物が  
出土した  
が、他の  
住居址か  
らは同化  
できない  
少量の遺  
物が出土  
したのみ  
である。  
検出住居  
址は他遺  
構との切  
り合い関  
係、出土  
遺物から、  
SC-04・  
23が古代  
のもので、  
他の住居

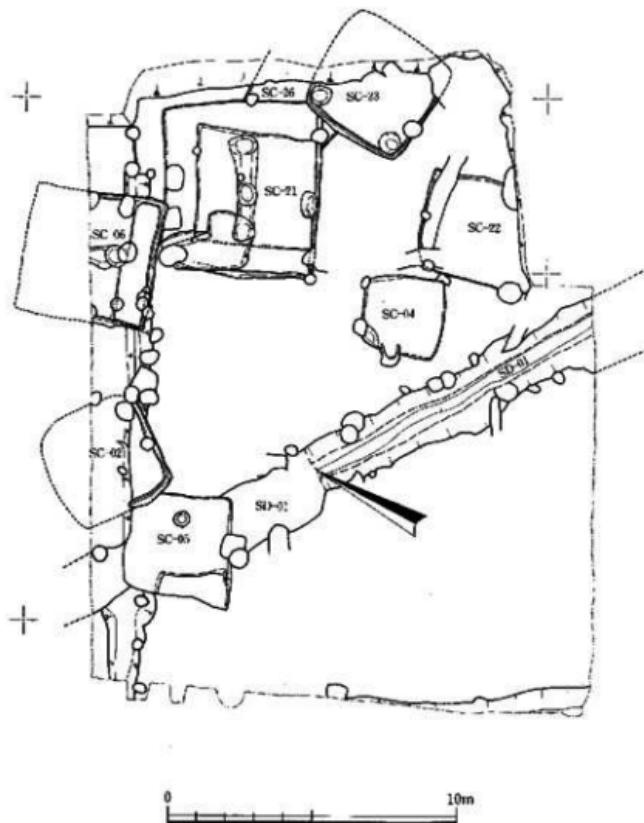


Fig. 1-3 壺穴住居址分布図

址は古墳時代前半期から中頃のものといえよう。

検出住居址は調査区の北半分に分布しているが、柱穴は調査区全域に分布している。柱穴はすべてのものが掘立柱建物の柱穴といえず、住居址の柱穴もあると考えられる。

また、本調査地は旧地形図でみると北へ緩やかに傾斜しており、南側に所在した住居址は削平を受けていると考えられる。本来的には、本調査地全域に少なくとも弥生時代後期から古墳時代の住居址が分布し、大集落の一画にあたるといえよう。

#### 1) SC-02 (Fig.1-4)

本住居址は調査の西側に位置し、SC-05を切り、SB-13に切られ、さらに中世以降の整地によって大部分が破壊されて、南側コーナー部分が遺存しているのみである。

一辺3m強の平面形方形の住居址で、20cm弱の遺存である。縁に沿って幅15cm前後、深さ5cm前後（床面から）の壁溝が巡っている。床面は叩きしめられている。

本住居址からは少量の土師

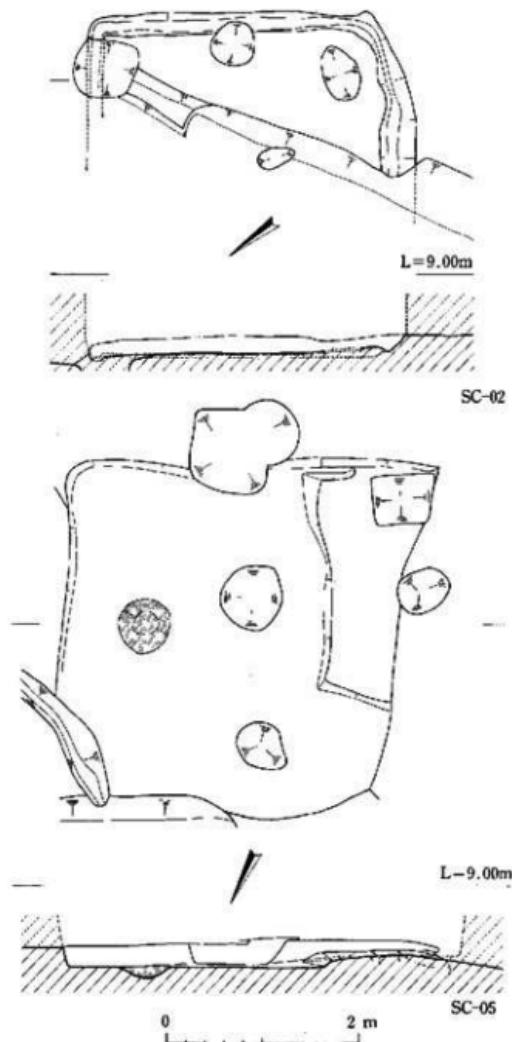


Fig. 1-4 第2・5号竪穴住居址 (SC-02・05) 実測図

器が出土したのみで、時期限定はできないが、切り合い関係も加味して、古墳時代前半期頃の

住居址といえよう。

## 2) SC-05 (Fig.1-4)

本住居址は調査区の西コーナー付近に位置し、SD-01の上に位置し、同溝を切り、北側コーナーをSC-02、南側コーナーをSB-14に切られ、さらにSB-12で切られて、西コーナーが削平を受けている。

一辺4m前後  
の平面形隅九方  
形の住居址で、  
西側に幅1.5m、  
長さ2m強、高  
さ10cm強（床面  
から）のベット  
を造り出してい  
る。住居址の遺  
存状態は20cm強  
で、床面は叩き  
しめられ、やや  
東寄りに径約50  
cm、深さ13cmの  
皿状の炉があり、  
炉には焼土が溜

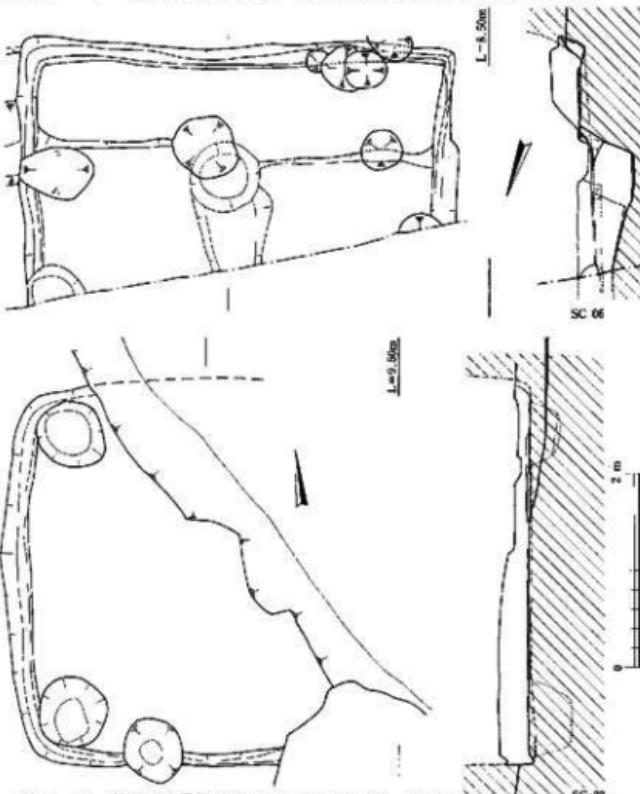


Fig. 1-5 第6・23号竪穴住居址 (SC-06-23) 実測図  
まっていた。壁は遺存部では緩やかに開きながら立ち上がっている。本住居址がSD-01の上に位置しており、床面はローム張りではなく、暗黒褐色の客土を叩きしめていたため、調査不充分で柱穴は確認できなかった。床の地山は鳥栖ロームであり、南側ベット付近で柱穴が確認できなかったことから主柱穴は2本柱と考えられる。

出土遺物 (Fig.1-7)：数点の土師器片とコンテナ1箱の弥生式土器が出土した。固化できる土

師器は、台付鉢(1)1点のみで、他に壺の胴部片などがある。1は、底径9.9cm、高さ3cmの台部の上に鉢(ほか)を組合せているが、鉢部は底付近が遺存しているのみである。台部の内外面はハケ目調整で、鉢部の外面はナデ調整、内面は磨きが施されている。

以上から本住居址は、4世紀前半頃のものか。

### 3) SC-06 (Fig.1-5, PL. 2)

本住居址は調査区の北側に位置し、SC-21を切り、SB-13や柱穴に切られ、中世以降に削平を受けている。

一辺5.5m前後の平面形方形の住居址で、南側に幅0.8~1m、高さ15cm(床面から)前後のベット状の造り出し部をもっている。

遺存状態は20cm前後で、壁に沿って幅15cm前後、深さ6cm前後(床面から)の壁溝が巡っている。床面は叩きしめられており、住居址中央部にベット端部から北西方向に幅60cm前後で、深さ20cm前後の掘り込みがある。

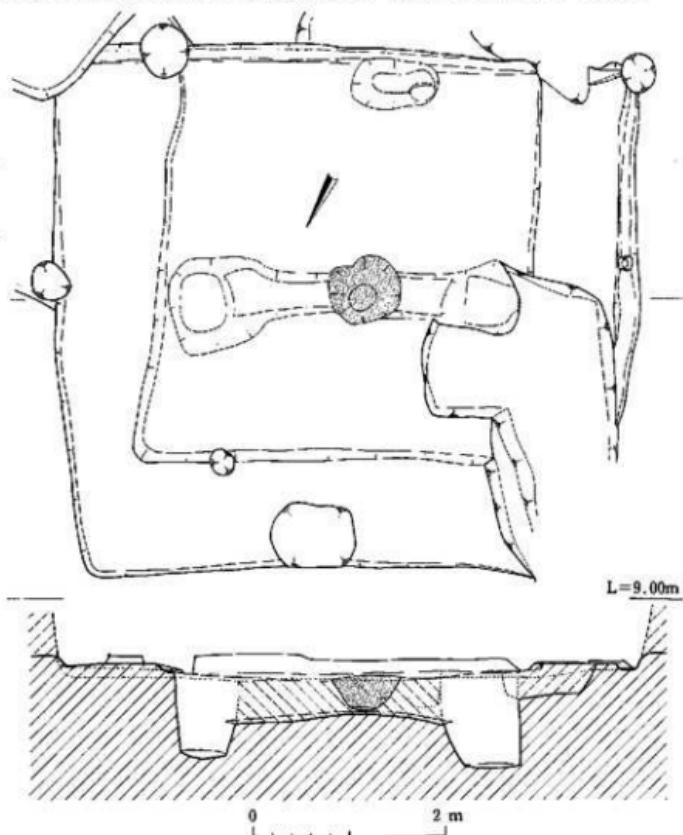


Fig. 1-6 第21号竪穴住居址(SC-21) 実測図

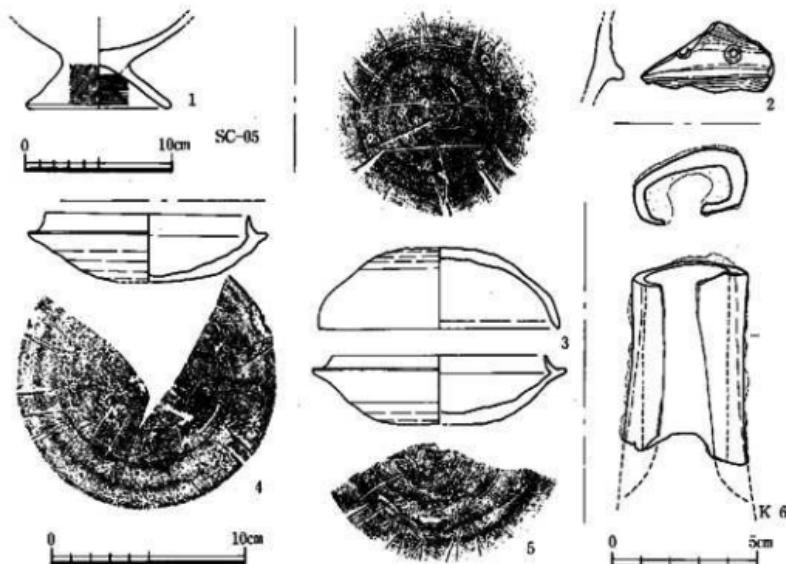


Fig. 1-7 第5・21号竪穴住居址 (SC-05-21) 出土遺物実測図

布掘り状の掘り込みの端部に径70cm、深さ40cm強（床面から）の柱穴があり、主柱穴と考えられる。なお、柱穴部を除いた布掘り状掘り込みは、ローム混じりの土で埋め、床面はロームを張り、叩きしめている。

本住居址からは少量の弥生式土器片と土師器片が出土したのみで、時期限定はできないが、古墳時代前半期から中頃のものといえよう。

#### 4) SC-21 (Fig.1-6, PL. 2)

本住居址は調査区の東部に位置し、西コーナー部をSC-06に、東コーナー部をSC-23にそれぞれ切られ、SC-26を切っている。

本住居址は一辺5m前後の平面形方形の住居址で、遺存状態は15cm前後である。住居址の床面は叩きしめられ、幅0.8~1mで高さ10cm（床面から）のベットが三辺にわたって削り出され、平面形がコの字状をなしている。南辺と西辺には幅15cm前後で6cmの深さをもつ壁溝があり、南辺中央部に長軸90cm、短軸50cm前後で30cmの深さをもつ平面形楕円形の土壙が掘り込まれている。床面中央部には北東の軸をもつ長さ2.2m、幅40cm、深さ45cm前後の布掘り状の掘り込みがあり、両端に一辺50cm前後の平面形隅丸方形で、90cm前後（床面から）の深さをもつ主柱穴が

ある。布掘り状掘り込みはローム混じり粘土と黒褐色土で固められ、床面は叩きしめている。なお、布掘り状掘り込みの中間に径50cm前後、深さ35cm前後で皿状に掘り込み炉があり、炉には焼土が

詰まって  
いた。

## 出土遺物

(Fig.1-  
7)：本住  
居址から  
は、弥生  
式土器に  
混じって  
少量の土  
師器と須  
恵器4点  
と鉄斧1  
点がベッ  
ト床面で  
出土した

2は土師  
器の小片  
で、詳細  
は不明で

あるが、  
複合口縁  
部をもつ  
壺形土器  
の口縁部  
片で屈曲  
部と考え  
られる。  
屈曲部直  
上に竹管

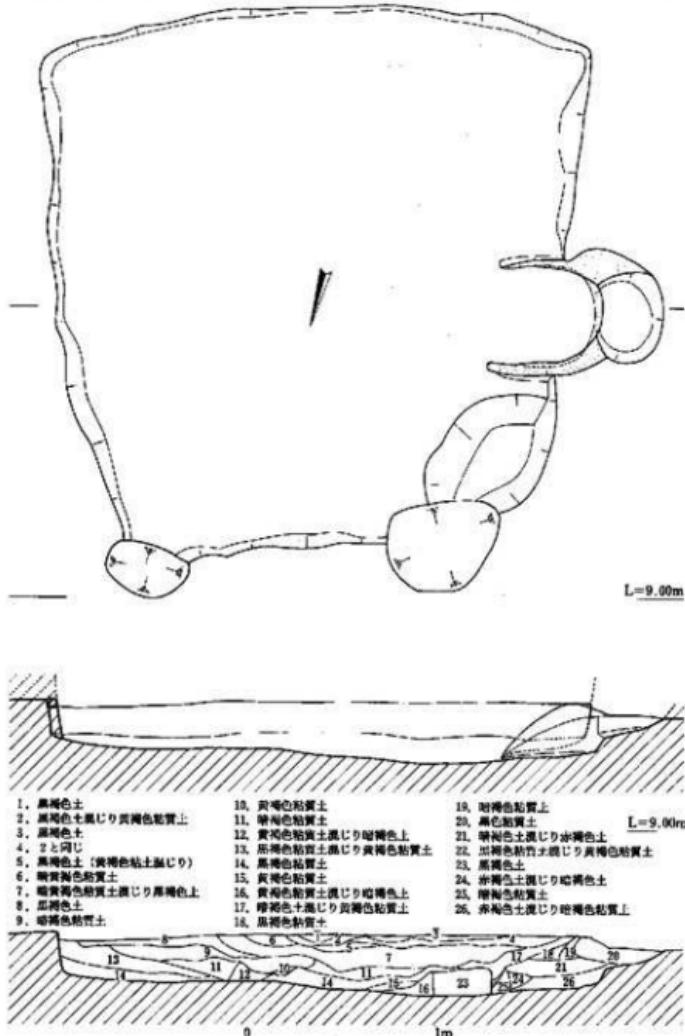


Fig. 1-8 第4号竪穴住居址 (SC-04) 実測図

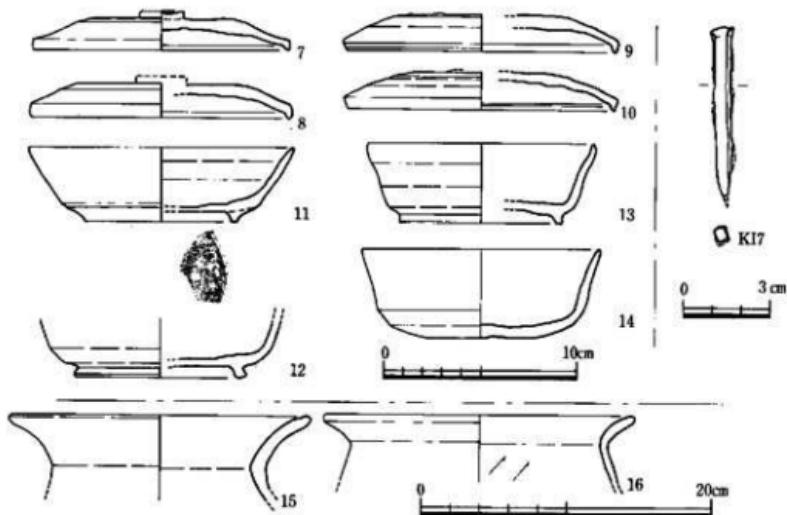


Fig. 1-9 第4号竪穴住居址 (SC-04) 出土遺物実測図

文がみられる。3は口径12.4cm、器高4.1cmの須恵器環蓋で、天井部にヘラ記号がある。4・5は須恵器環身で、4は体部に2ヶ所、5は底部から体部にかけての部分にヘラ記号がみられる。4は口径10.6cm、器高3.6cm。5は口径11cm、器高3.6cm。6は袋状鉄斧の袋部で、刃部は欠損している。

本住居址はコの字状のベットをもち、ベットがない辺に横円形の土壤をもち、中央に炉を挟んだ2本の主柱穴からなる平面形方形の住居址である。3~5の須恵器環は床面からまとまって出土したもので、6世紀末頃の所産である。住居址の形状から、これらの須恵器の時期とは考えられない。須恵器は、本住居址の中に切り込まれた別造構のものと考えられる。本住居址は切り合ひ関係からもSC-06よりは古く、2の土削器の時期と考えられ、4世紀のものといえよう。

### 5) SC-22・26

SC-22は調査区の東隅付近に位置し、SD-25や柱穴に切られ、さらに削平を受け、5cm前後の遺存である。3.5×4mの平面形方形の住居址で、床面は叩きしめられているが、遺存状態が悪く、本住居址の柱穴を限定することができなかった。出土遺物は土師器が少量出土したのみである。

SC-26は調査区の中央東側端部に位置し、SC-21・23に切られている。一辺3m強の方形の

住居址と考えられるが、遺存状態も5cm以下と悪く、詳細はわからない。

以上、2基の住居址は古墳時代前半期のものか。

### 6) SC-04 (Fig.1-8)

本住居址は調査区のほぼ中央部のやや東寄りに位置し、ほとんど単独の状態で検出した。

北辺が2m、南辺が2.8m、南北が2.8m弱と平面形台形を呈する住居址で、30cm前後の遺存である。なお、西辺中央部にカマドが設けられている。埋土には上から黒褐色土に黒褐色土混じり黄褐色粘質土を挟み、その下に黒褐色土混じり黄褐色粘質土、暗褐色～黒褐色粘質土が堆積し、ロー

ムの床面

となる。

床面はほ

ぼ平坦で

叩きしめ

てはいる

ものの他

の住居址

ほどでは

ない。壁

はほぼ垂

直に立ち

上がって

いる。カ

マドは60

cm幅で30

cm前後半

円状に西

壁を掘り

込み、白

色粘質土

と黄褐色

粘質土と

黒褐色土

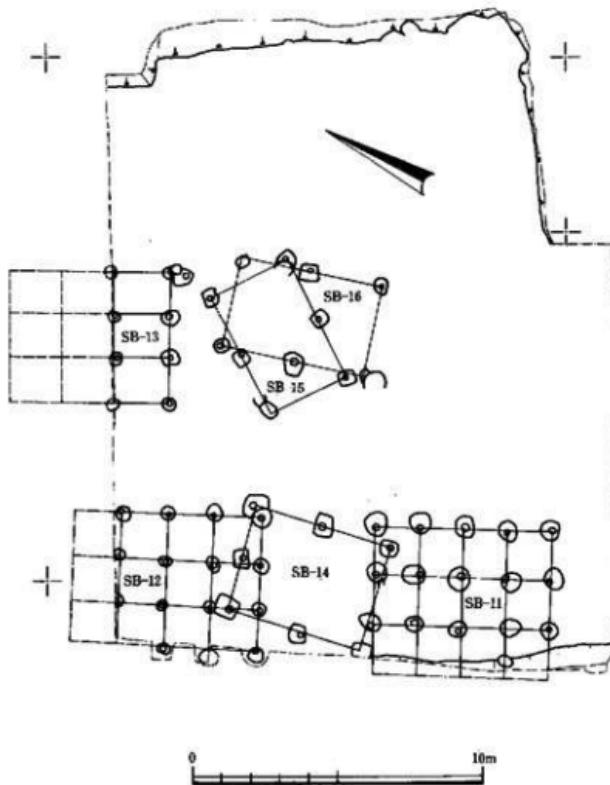


Fig. 1-10 掘立柱建物分布図

を混合して、壁から住居址の中にかけて長さ60cmでドーム状に造り出しているが、天井部は破壊されている。焚口の幅は50cm前後で、カマドの内面および床面は赤褐色を呈し、厚さ2cm前後で炉壁状をなし、カマド内には多量の焼土や焼土ブロックが詰まっていた。なお、煙道は径10cm前後と考えられるが大井部が破壊されていた。

また、本住居址床面では柱穴は確認できなかつた。本来的にはコの字状のベットが三辺を巡り、5m前後の平面形方形の住居址で、深く掘り込まれた部分のみ削平を免れて遺存したものと考えられる。

出土遺物 (Fig.1-9) : 本住居址からは比較的まと

まったく須恵器・土師器と1点の鉄器が出土した。

7~10は無返しの口縁をもち、天井に円形のつまみをもつ須恵器壺蓋である。口径は7が13.4cmともっとも小さく、8が13.7cm、9~10が<sup>14.3</sup>cm。器高は7が2cm、他は2.3cm前後と考えられる。

11~13は高台付壺で、11の外底には板状圧痕がみられる。14は無高台壺である。器面は7~10の天

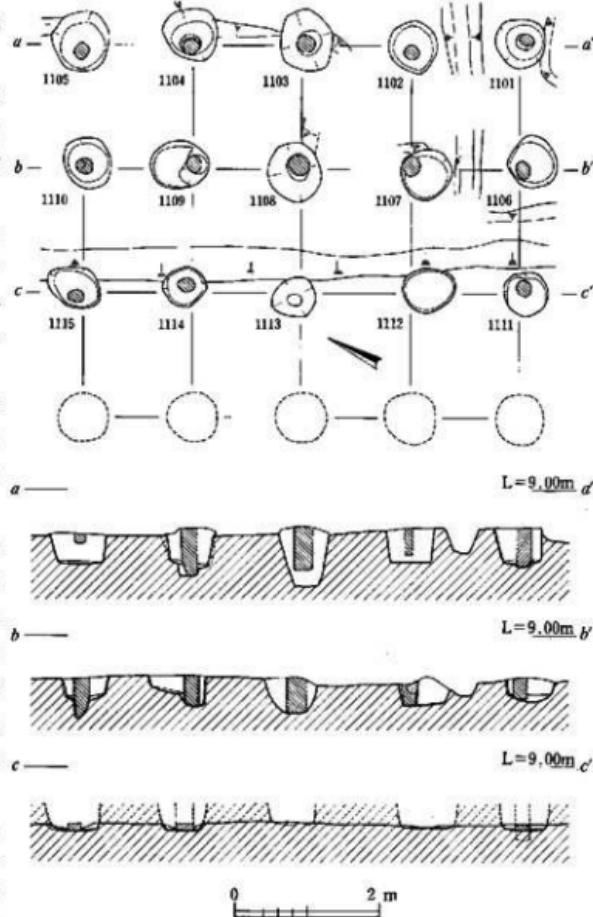


Fig. 1-11 第11号振立柱建物 (SB-11) 実測図

井部、14の外底がヘラ削り、11の内底がナデ調整のほかは7~14の須恵器は回転ナデ調整が施されている。口径は11が8cmと大きく、13が<sup>11.9</sup>cm、14が<sup>12.5</sup>cm。器高は11が3.8cm、13が<sup>4.05</sup>cm、14が<sup>4.55</sup>cm。底径は11が8cm、12が<sup>8.9</sup>cm、13が<sup>8.5</sup>cm、14が<sup>8.5</sup>cmである。15~16は土師器

壺の口縁部である。口径は15が20.9cm、16が21.6cmである。以上のはか移動式カマド片も出土している。

以上から、本住居址は8世紀前半期のものといえよう。

### 7) SC-23 (Fig.1-5, PL. 2)

本住居址は調査区の東側に位置し、SC-21・26、SK-09を切っている。

一边3.8mの平面形隅丸方形の住居址で30cm前後の遺存である。床面は平坦に叩きしめられ、幅10cm強で5cm前後の深さ(床面から)をもつ壁溝が巡っている。壁は床面からほぼ垂直に立ち上っている。コーナー部に径70cm前後で、40cm・30cmの深さ(床面から)をもつ柱穴があることから、4本柱を主柱穴とすると考えられる。

本住居址からは少量の土器片が出土したのみで、時期限定はできないが、ほとんどの遺構を切っていることから古墳時代後半期のものか。

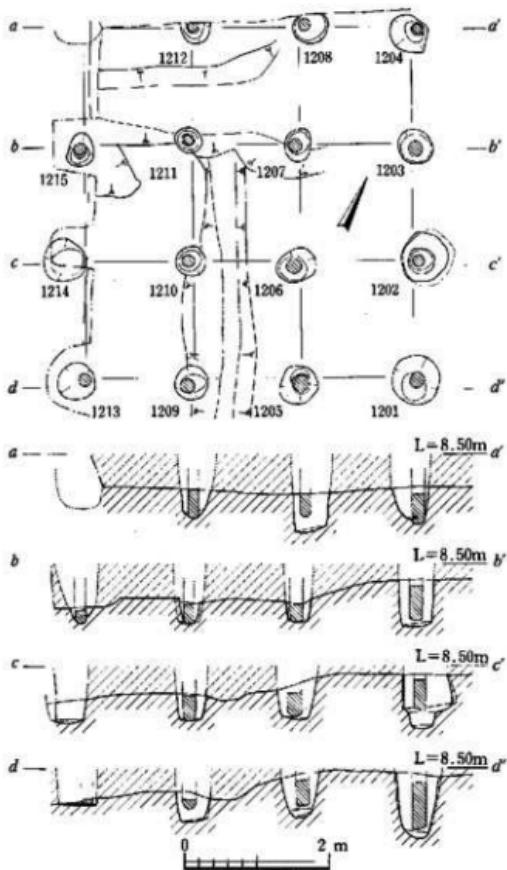


Fig. 1-12 第12号掘立柱建物 (SB-12) 実測図

### 3. 掘立柱建物 (SB) (Fig.1-10, PL. 2)

本調査区では多数の柱穴を検出したが、掘立柱建物（以下、建物とする）として確認できたものはSB-11～16の6棟である。多数の検出柱穴のなかで、柱痕跡が確認できなかったものに

については堅穴住居址の主柱穴の可能性がある。検出柱穴の80%前後は建物の柱穴と考えられる。

検出建物のうち、SB-11～13はいずれも3×4間の縦柱建物で倉庫と考えられ、配置に規格性をもっており、官衙的な様相をもっている。

#### 1) SB-11 (Fig.1-11, PL. 2)

本建物は調査区の南西部に位置し、SB-14を切り、西側が中世のSD-03に削られている。本建物とSB-12は桁行の柱筋が通っており、SB-13とともに一連のもので、SB-12とは柱痕跡中心間で4mの間隔をもっている。

柱穴の掘り方は径70cm前後の円形で、標高7.5m前後まで掘り込まれている。柱痕跡は径24cm前後である。桁行の柱間は、柱痕跡中心間で145～160cmまでばらつきがみられるが、平均すると153.75cmとなり、梁行の柱間は150～185cmまでばらつきがあり、平均すると166.67cmとなる。桁行は6.1～6.2mで、平均すると6.15mとなる。梁行は推定5mである。

本建物の柱穴からは少量の土師器・弥生式土器の細片が出土したのみである。本建物はSB-12・13と一緒に

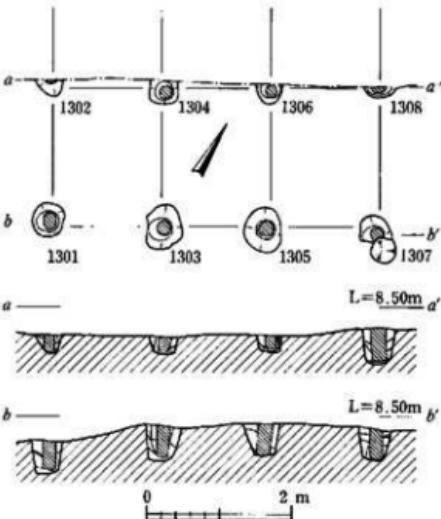


Fig. 1-13 第13号掘立柱建物 (SB-13) 実測図

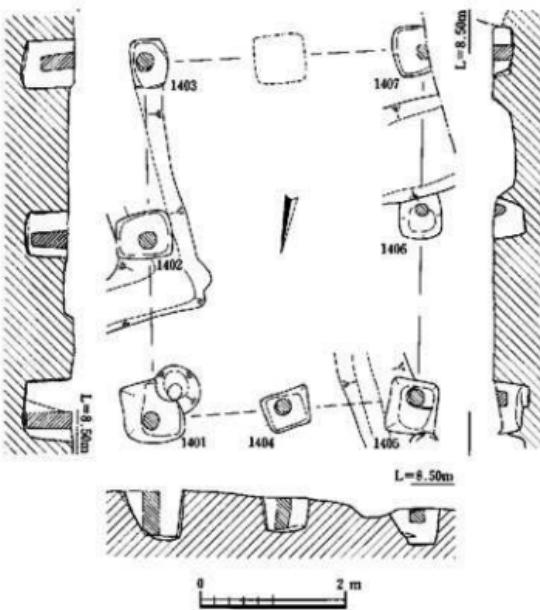


Fig. 1-14 第14号掘立柱建物 (SB-14) 実測図

連のものであることから、古墳時代後期と考えられる桁行5mのN-27°Wの主軸方向をもつ総柱の倉庫といえよう。

### 2) SB-12 (Fig.1-12, PL. 2)

本建物は調査区の西北部に位置し、SB-14・SC-05・SD-01を切っている。2×3間分の柱穴を確認した後、梁行の柱穴があると考えられる部分のみ拡張し、柱穴を検出し、梁行が少なくとも3間あることを確認した。

柱穴掘り方は径15cm前後と、SB-11に比較して一回り小さいが、これは削平を受けていたため本来的には径70cm前後であったと考えられ、標高7.7m前後まで掘り込まれており、柱痕跡は18cm前後である。南北方向を桁行とすると柱痕跡間は156cmから166cmまでばらつきがあり、平均すると161cmとなり、梁行柱間は142～172cmまでばらつきがあり、平均すると155.6cmとなる。

本建物も時期決定できる遺物はなく、SB-14との切り合い関係から古墳時代後期と考えられる。本建物もN-27°Wに主軸方向をもつ桁行6.64m、梁行4.67mの3×4間の総柱の建物で倉庫と考えられる。

### 3) SB-13 (Fig.1-13)

本建物は調査区北側中央部に位置し、SC-02・06を切り、8世紀前半の柱穴に切られている。3×1間分の柱穴を検出した。桁行は北へ延びると考えられるが、隣接している社屋によって破壊されている。SB-12の桁行2間目の梁行の柱筋と、本建物の梁行の柱筋が通っており、SB-12・13の間隔は3.7mあり、SB-11・12の間隔とほぼ近い数値をもっており、SB-11～13は一連の建物と考えられる。

柱穴掘り方は径50cm前後の円形で、側柱は標高7.8m前後まで掘り込まれており、柱痕跡は20cm前後である。桁行の柱痕跡間186～206cmまでばらつきがみられるが、平均すると193cmである。梁行の柱間も140～160cmまでばらつきがあり、平均すると150cmである。

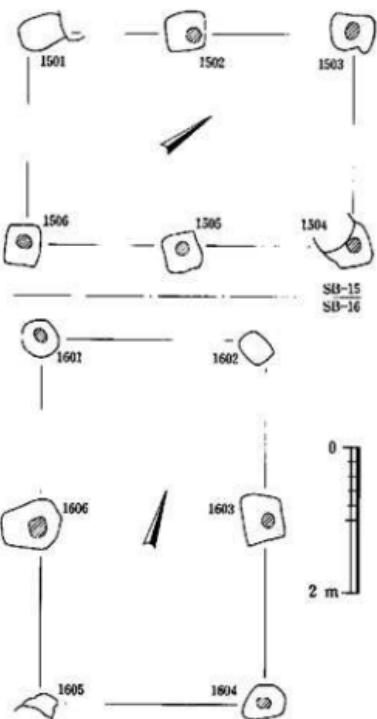


Fig. 1-15  
第15・16号掘立柱建物 (SB-15・16) 実測図

本建物の柱穴07は、SP-0022に切られている。SP-0022の掘り方からは7世紀末から8世紀前半の須恵器の环身・环蓋の破片があり、本建物は8世紀まで下がることはないといえよう。SC-02・06が古墳時代の前半期と考えられ、切り合い関係からみていくと本建物は古墳時代中期後半から後期の間に位置するといえよう。本建物は、梁行4.5mでN 30°-W の方向をもつ3×4間（3×2間か）の総柱の建物で、倉庫と考えられる。

#### 4) SB-14 (Fig.1-14)

本建物は調査区の西側中央部に位置し、SC-05を切り、SB-11・12に切られている。7個（1個は削平されたが）の側柱の柱穴を検出した。

柱穴は一辺70cm前後の平面形方形の掘り方をもち、標高7.8m前後まで掘り込まれている。柱痕跡は径20cm前後の円形である。

本建物は、N-9.5°-W の主軸方位をとる桁行4.8m、梁行3.7mの2×2間の建物で、出土遺物や柱穴掘り方の形状、柱穴間隔などから5世紀中頃から後半のものか。

#### 5) SB-15・16 (Fig.1-15)

2基の建物は調査区のほぼ中央部に位置し、SB-16はSC-04を切っている。SB-15・16とも、柱穴は一辺50cm前後の平面形方形の掘り方をもち、柱痕跡は15cm前後である。SB-15がN -35°-E の方位をとる桁行4.5m、梁行3mの1×2間の建物で、SB-16はN-16°-W の方位をとる桁行5m、梁行3.2mの1×2間の建物である。ほぼ同一規模であるが、SB-16はSC-04を切っており、少なくとも8世紀前半から後時期の古代のものである。SB-15はSD-01に直行しているが、古代のものであろう。

### 4. 第1号溝 (SD-01) と出土遺物 (Fig.1-2・16、PL. 3)

本溝は調査区のほぼ中央部に位置し、N-56.5°-W の方位をとり、SC-05、SB-12・14をはじめ多くの柱穴に切られている。

検出面での幅は160～210cmで、下底まで3mあり、下底幅は18cm前後で、下底から2.2mまでほぼ垂直に近い角度で立ち上がりその上が朝顔状に開き、横断面形はY字状をなしている。なお、溝がY字に開き始める北側壁には規則性はないが、径8cm前後の杭を打ち込んだ痕跡がみられる。12層から下はシルト層に粘質土が挟まれており、土の締まりがなく、11層・7層は黄褐色ロームを張りつめた状態になっており、人為的に埋めたと考えられる。遺物は1層から5層にかけて多量に出土し、溝中央部の8層下部から5層にかけては壺形土器・壺形土器などの完形品が並べられた状態で出土した。12層から底面にかけては、18層中で壺形土器のほぼ完形品

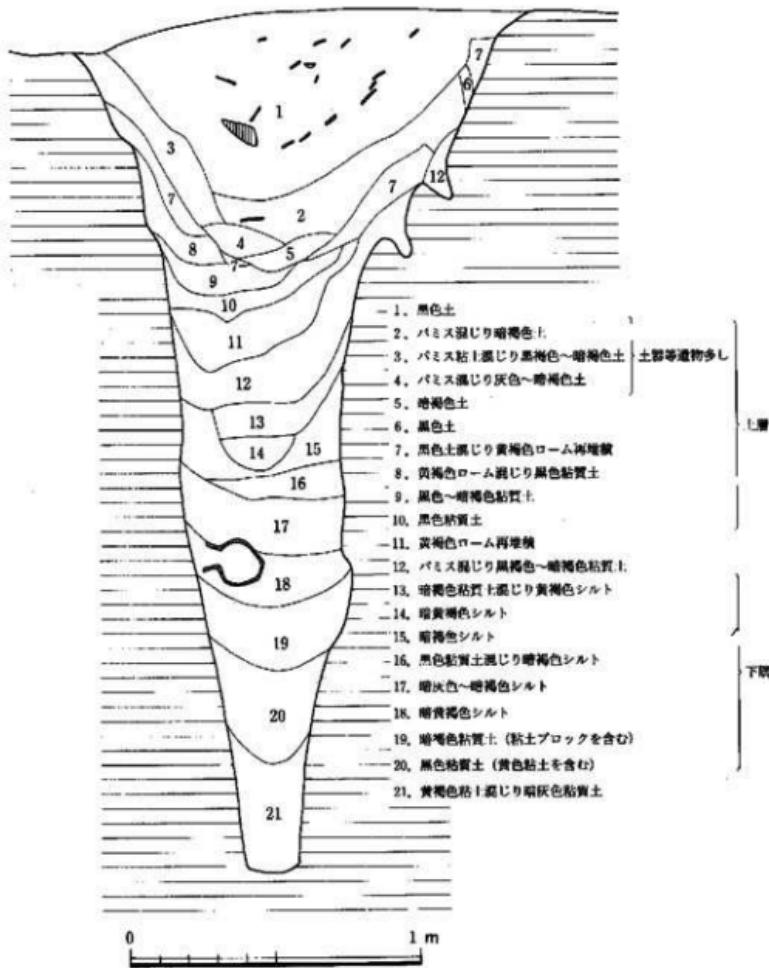
L=9.00m

Fig. 1-16 第1号溝 (SD-01) 土層断面図

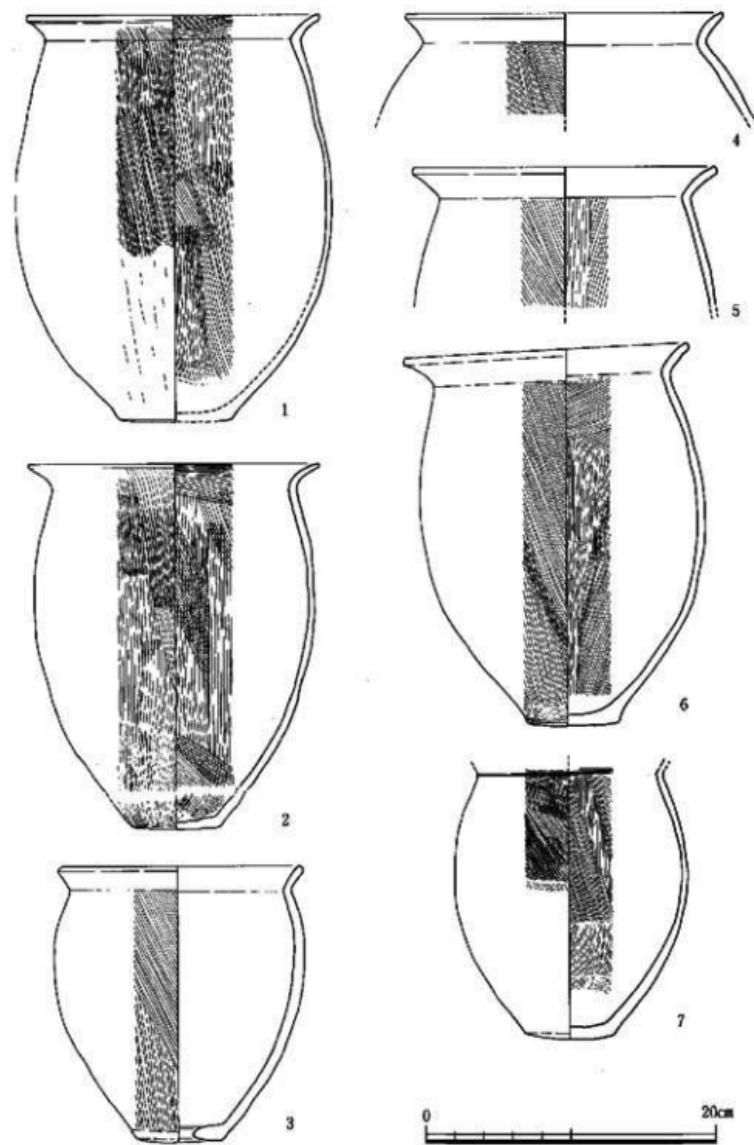


Fig. 1-17 第1号溝 (SD-01) 出土土器実測図(1)

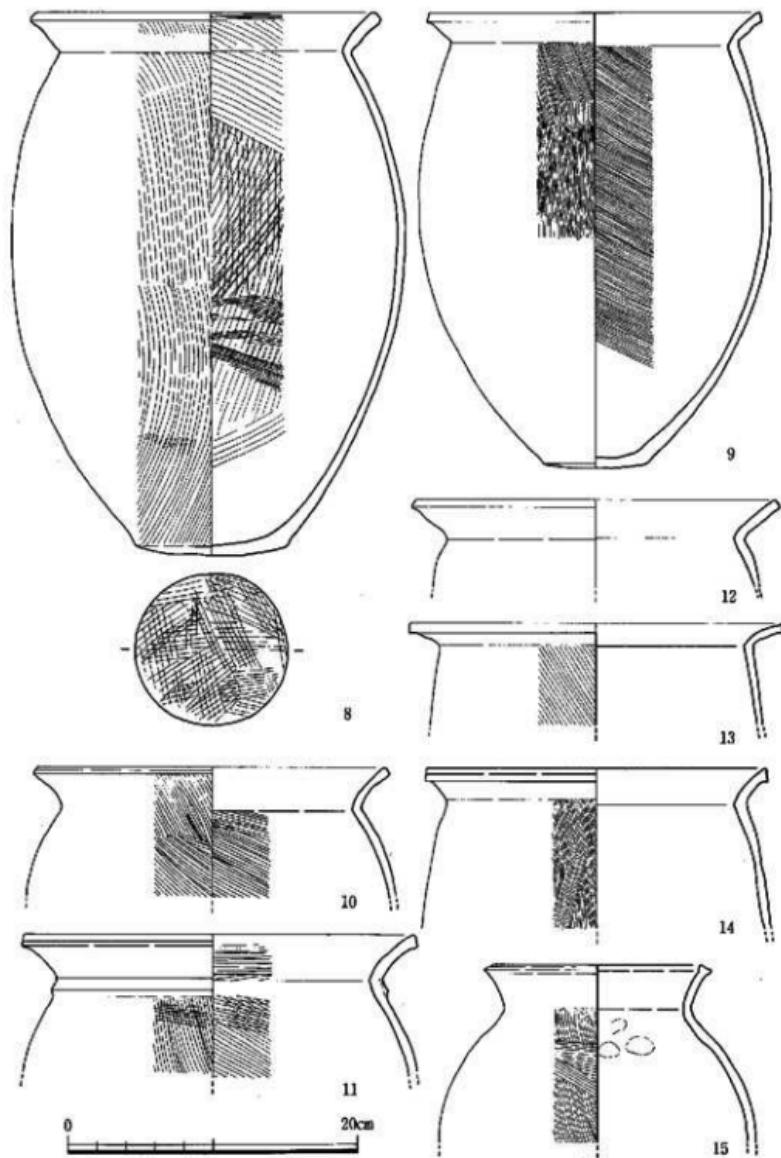


Fig. 1-18 第1号溝 (SD-01) 出土土器実測図(2)

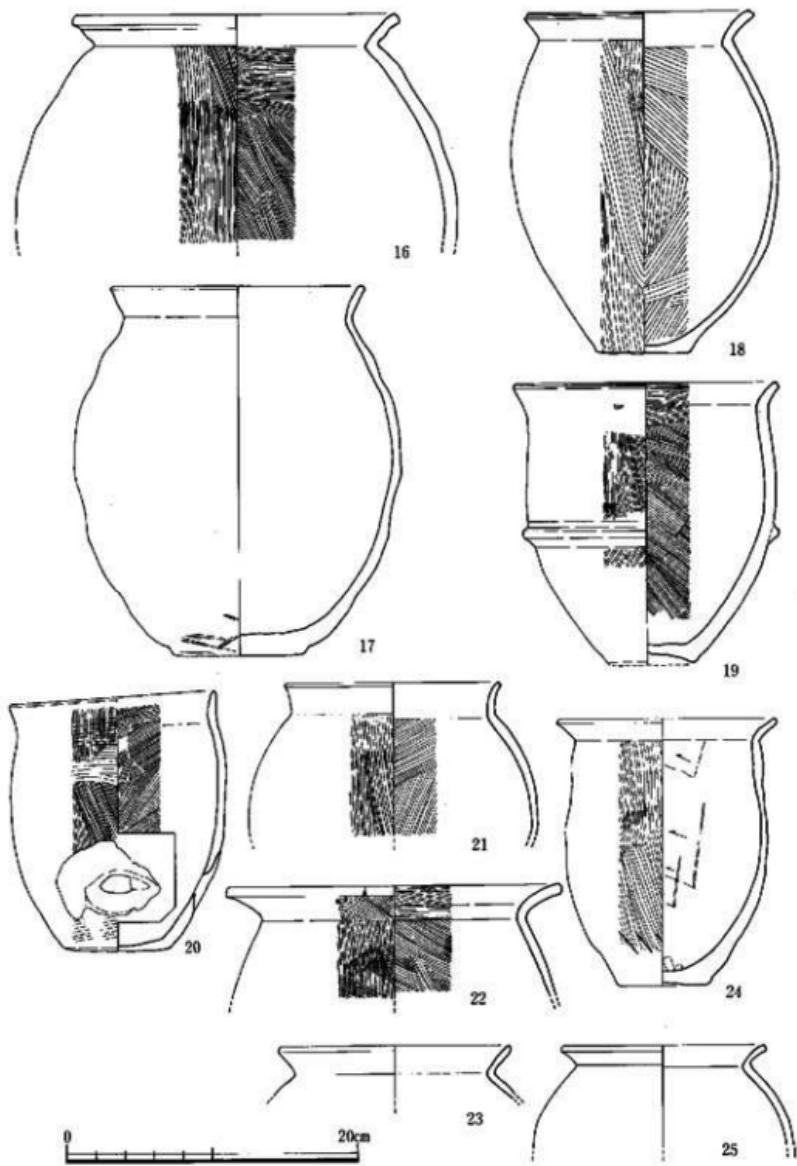


Fig. 1-19 第1号溝 (SD-01) 出土土器実測図(3)

が出土したが、形を保っている土器はこの1点で、ほかには20×30cmのポリ袋2袋分の土器の小片と石器片が出土したのみである。ちなみに第5層から上では、60×37×12cmのコンテナ30箱分の土器を中心とした遺物と壺・壺形土器など完形品が31点出土した。

### 1) 出土土器 (Fig.1-17~27、PL. 3・4)

壺形土器・壺形土器・鉢形土器・高杯・器台・支脚・手捏ね土器・婧壺などが出土している。上器は壺形土器が約40%ともっとも多く、壺形土器が約30%、器台が約15%、鉢形土器が約5%、高杯約5%の割合で出土している。

**壺形土器 (1~31) :** 壺形土器はくの字状をなす口縁部をもち、内部の脇曲部の稜線が明瞭で、最大径は胴部中央から下位にあり、底部が凸レンズ状をなすもの(A型)、くの字状をなす口縁部の外面脇曲部直下に三角凸帯を巡らし、胴部中央から上に最大径をもち、その下に貼付け刻目凸帯を巡らし、底部が凸レンズ状をなすもの(B型)、くの字状の口縁部をもち球状に張る胴部をもつもの(C型)とその他に大別できる。

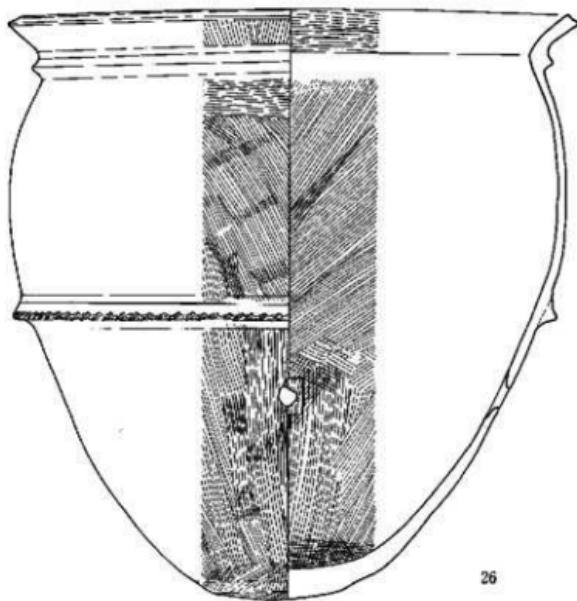
A型は1・6に代表され、3・5~10・14・17・18・22があたる。口縁部はほとんどのものが横ナデ調整、底部内底・外面はナデ調整、胴部内外面はタテ方向のハケ目調整が施されている。8の外底にはハケ目調整が施されている。17は平底で、3は底部に焼成後の穿孔が行なわれており顔として使用されている。8がもっとも大きく、口径23.4cm、最大径27cm、器高37.5cm、底径10.2cmである。18がもっとも小さく、口径16cm、最大径18.4cm、器高23.5cm、底径6.4cmである。口径でみていくと、23cm前後、20cm前後、17cm前後のものがある。

B型は30に代表され、11・26~30・31があたる。口縁部や口縁直下、胴下半部の凸帯貼付け後にナデ調整を施し、30の外底がナデ調整で仕上げているほかの器面は内外面ともハケ目調整が施されている。口縁部直下の凸帯は31がコの字形のほかは三角凸帯であり、胴部凸帯はいずれもコの字の上に刻み目を入れており、31は2条巡らしている。26の底部は丸みが強い。器体はA型に比べて大きく、口径は35~40cm弱、最大径は40~50cm、器高は26がもっとも低く40.8cm、31が67cmと高い。26の胴下半部には焼成後の穿孔がみられる。

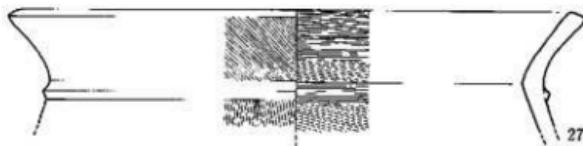
C型は11・15・16・23にあたり、口縁部と胴部内面がナデ調整、胴部外面はハケ目調整が施されている。16のみ胴部内面にハケ目調整がみられる。器体は口径15cmから22cmと小振りである。

2は口縁部に最大径があるが、A型の細くなったものか。20・21はほぼ垂直に立ち上がる口縁部をもっており、20は口径14.3cm、器高17.6cmで、胴下半部に焼成後の穿孔がみられる。19は胴中央に1条のコの字状凸帯が巡っている。

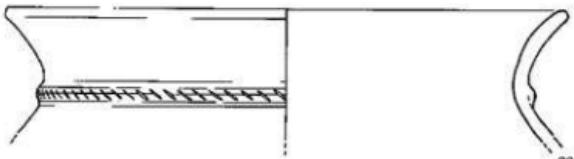
**壺形土器 (32~49) :** 壺形土器として、複合口縁をもつもの(A型)、短頸壺(B型)とその他に大別できる。



26



27



28



Fig. 1-20 第1号溝 (SD-01) 出土土器実測図(4)

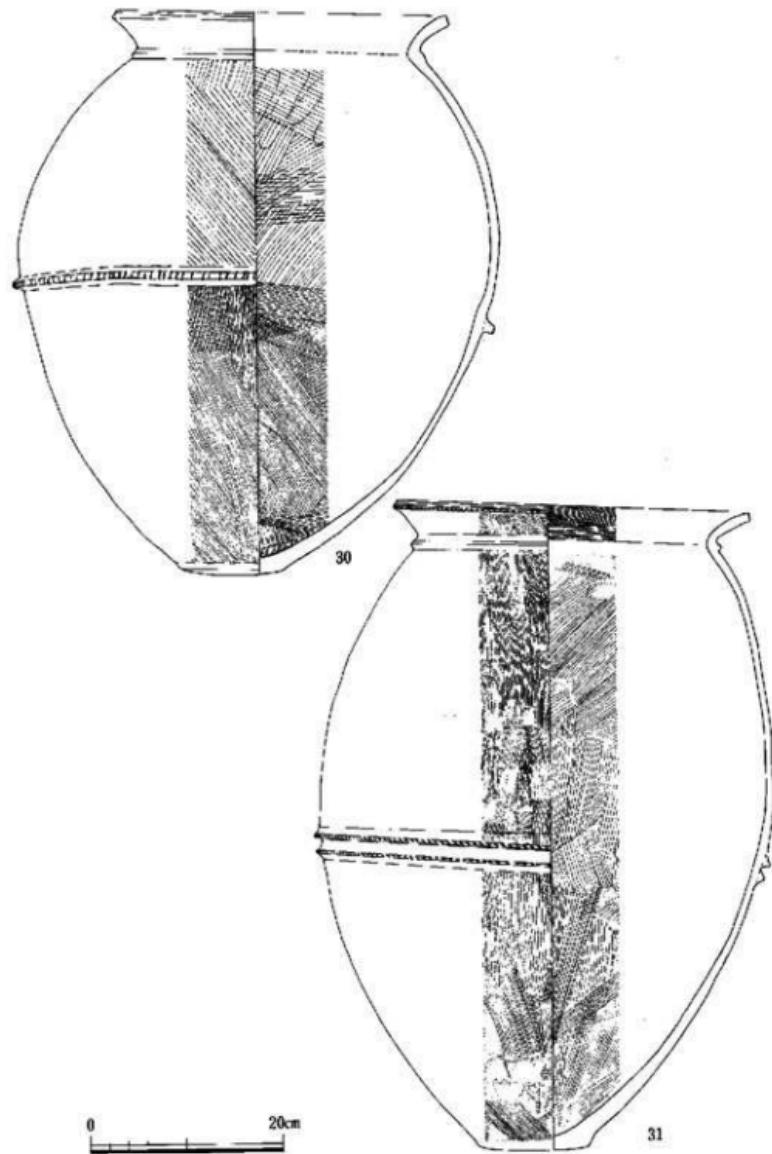


Fig. 1-21 第1号溝 (SD-01) 出土土器実測図(5)

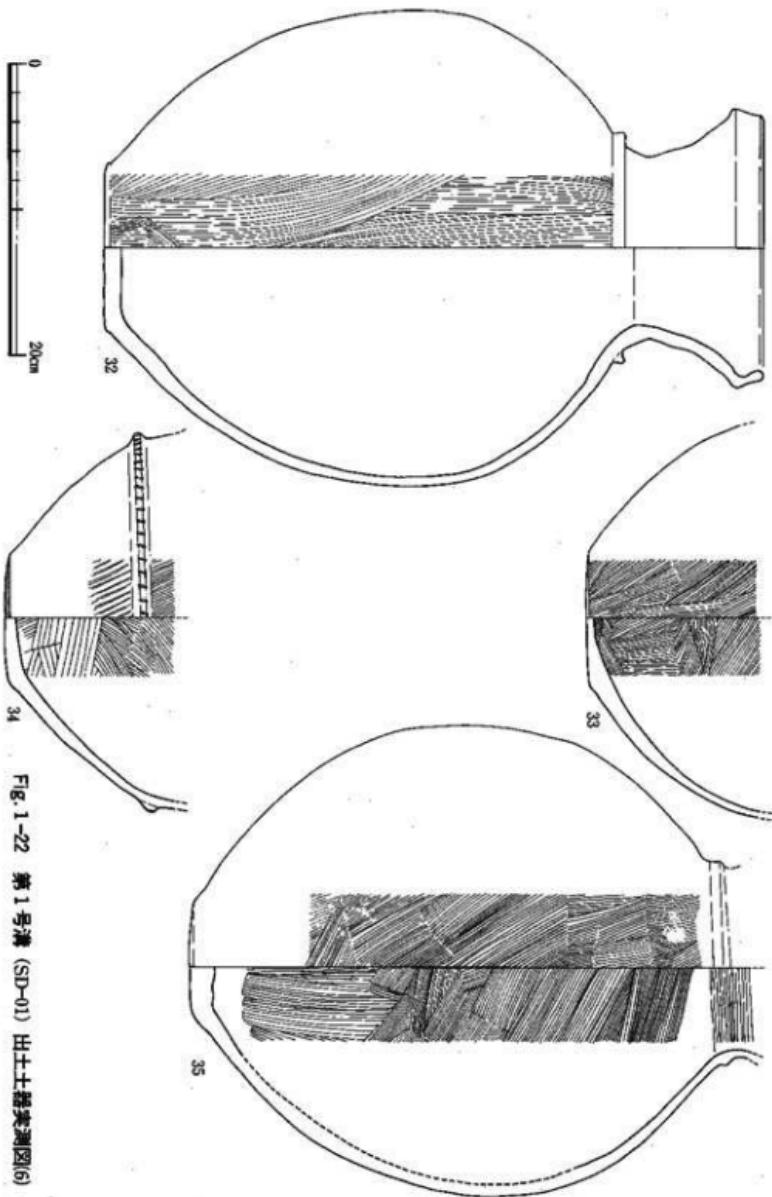


FIG. 1-22 第1号溝 (SD-01) 出土土器実測図(6)

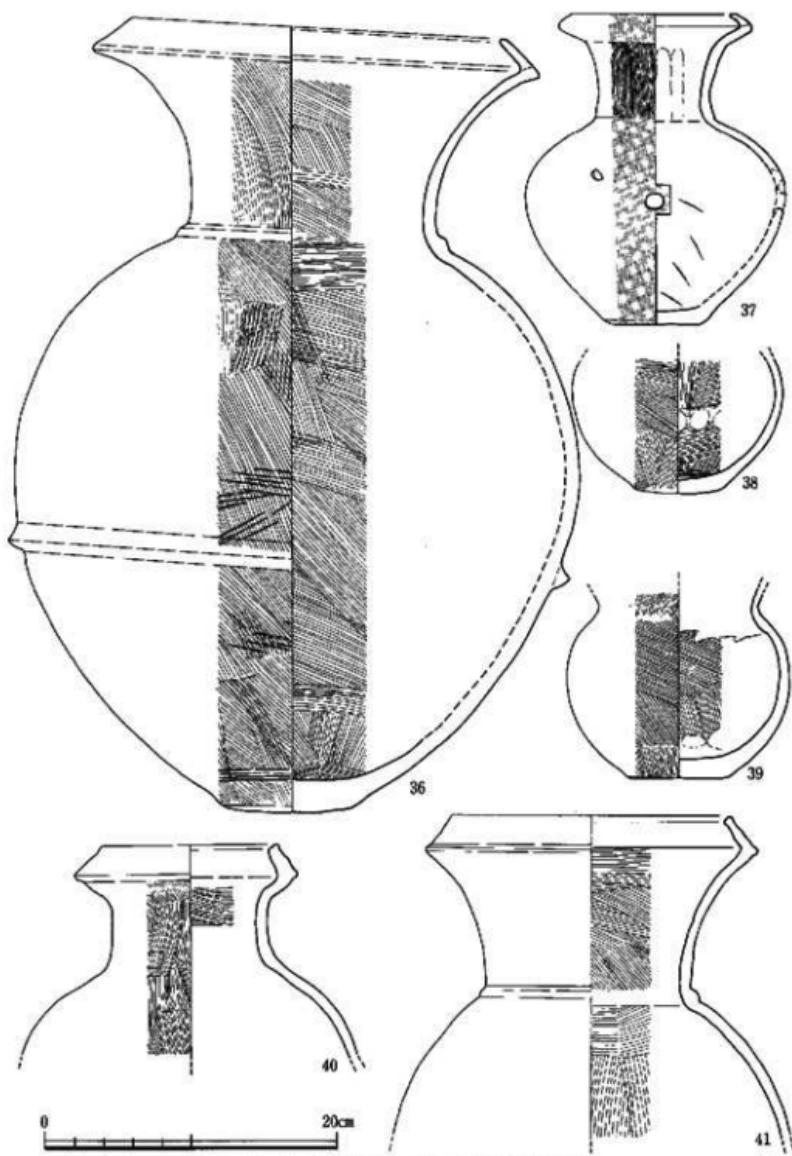


Fig. 1-23 第1号溝 (SD-01) 出土土器実測図(7)

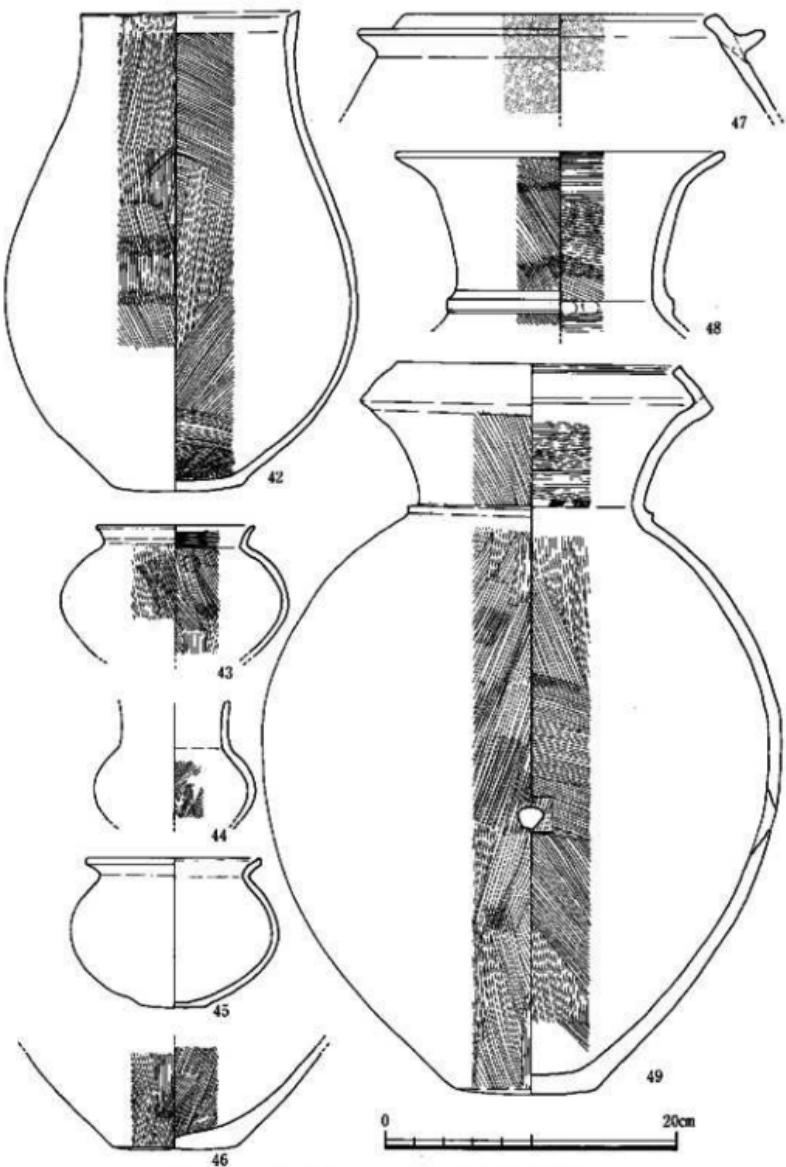


Fig. 1-24 第1号溝 (SD-01) 出土土器実測図(8)

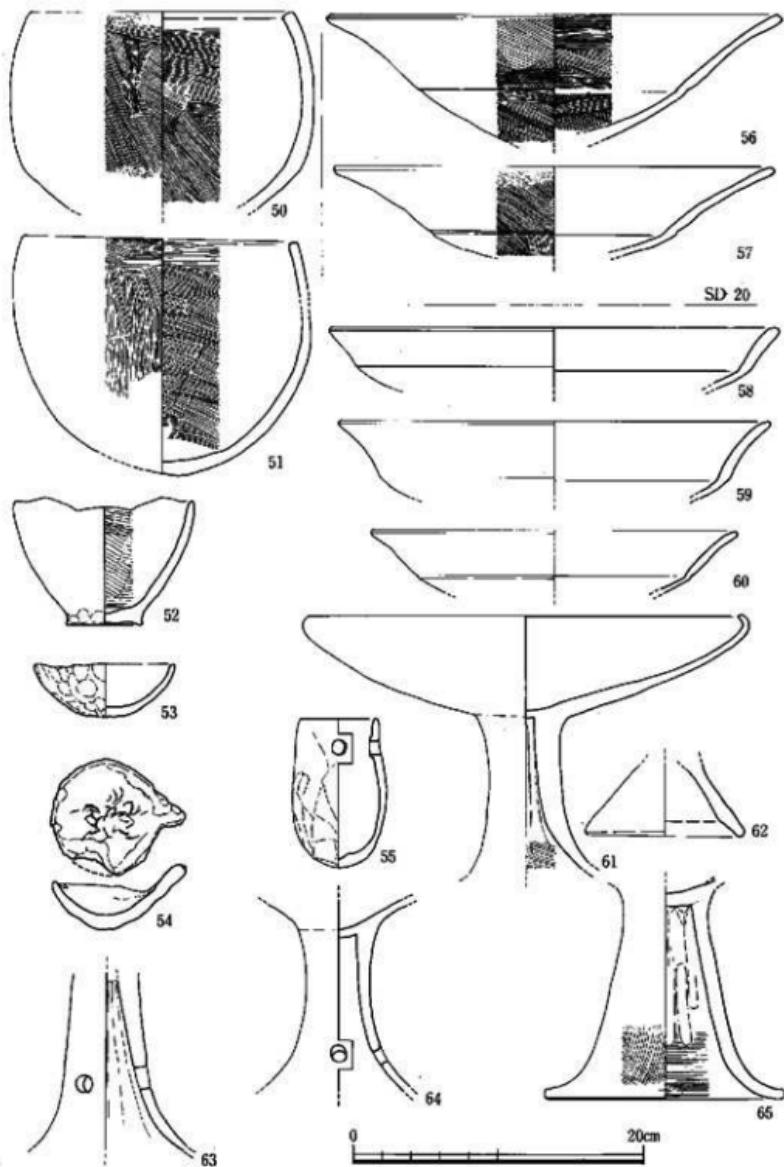


Fig. 1-25 第1号溝（SD-01）出土土器実測図(9)

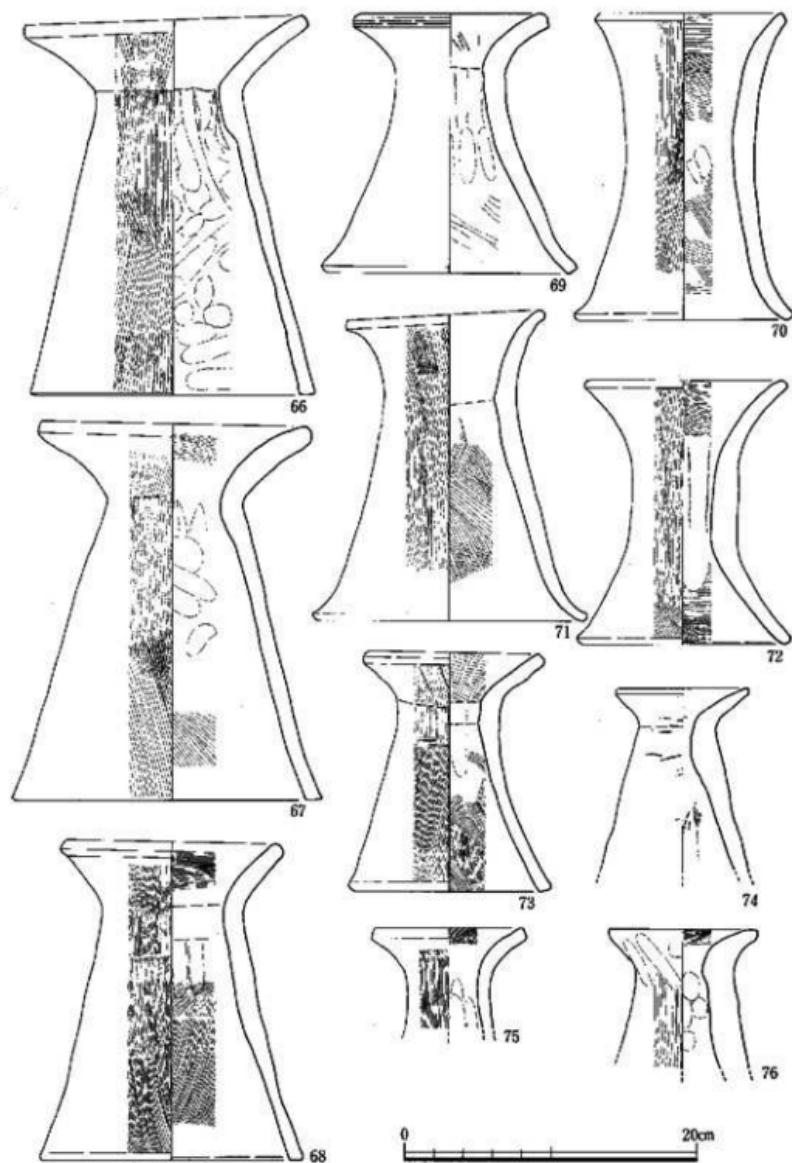


Fig. 1-26 第1号溝 (SD-01) 出土土器実測図(1)

A型は32~37・40・41・49にあたり、37・40のように頸部をもつもの（A I型）と、頸が不明瞭なもの（A II型）に分けることができる。前者は小振りで、後者は大きい。37は18層から出土し、器外面および口縁部内面は丹塗りで、胴部中央と胴上半部の2ヶ所に焼成後の穿孔がある。口縁部は横ナデ、頸部はハケ目調整、胴上半部は研磨、胴下半部はハケ目調整後ナデ、胴部内面はヘラ状工具によるナデ調整が施されている。口径11cm、器高21.1cmである。A II型は、頸部と胴部の境に凸帯を巡らし胴下半部に凸帯を巡らすものと、凸帯がないものとがあり、底部は凸レンズ状をなしている。器面は、口縁部および凸帯貼付け後にナデ調整が施されているほかは、内外面ともハケ目調整が施されている。36がもっとも大きく、口径25cm、器高54cmで、いずれも45cm以上の器高をもっている。

B型は39・43~45にあたり、A型に比べて小さく、12cm前後である。45は胴部がヘラ研磨、口縁部が横ナデ調整、内面はナデ調整が施され、口径12cm、器高11.2cmである。

42は特殊なもので、長胴壺といえるか。口径15.1cm、器高32.7cmである。47は樽形土器で、瓢形土器の下半部状をなしており器外面および口縁部内面は丹塗りで、口径21cmである。48は頸部くびれ部から広く緩く開き、口縁部を意識したように開いている。頸部と胴部の境に三角凸帯を貼付けている。口径22.8cm。44は直口壺か。

鉢形土器（50~54・62）：50・51はボール状をなし、口縁部はやや内傾している。50は器外面ともハケ目調整を施し、口縁部は横ナデ調整、下半部はナデ調整を加えハケ目を消している。51は口縁端部が横ナデ調整で、器内外面はハケ目調整が施され、底部は指による調整か。50は口径18cm、器高約14.5cm。51は口径19cm、器高11.2cmである。52は口径12.2cm、器高8.6cmの小形の鉢で、口縁は波状をなしている。53は手捏ねで皿状に整形し、内面はナデ調整で仕上げている。口径9.8cm、器高3.65cm。54は手捏ねでスプーン状に整形している。器内面には爪跡が明瞭に残っている。62は台付の鉢か。

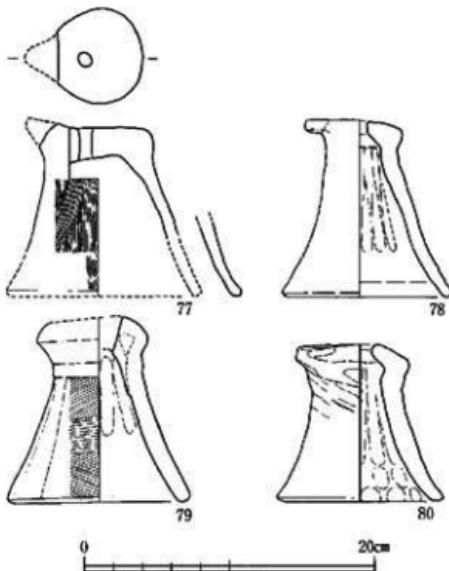


Fig. 1-27 第1号溝（SD-01）出土土器実測図(1)

高坏 (58~61)  
 •63~65) : □  
 緑部が坏上半部から大きく開くもの (58~60) と、□縁部が内側にすぼまるもの (61) がある。器面は研磨が施されていると考えられるが摩耗している。58が口径31.2cm、60が

口径25.6cm、  
 61が口径30

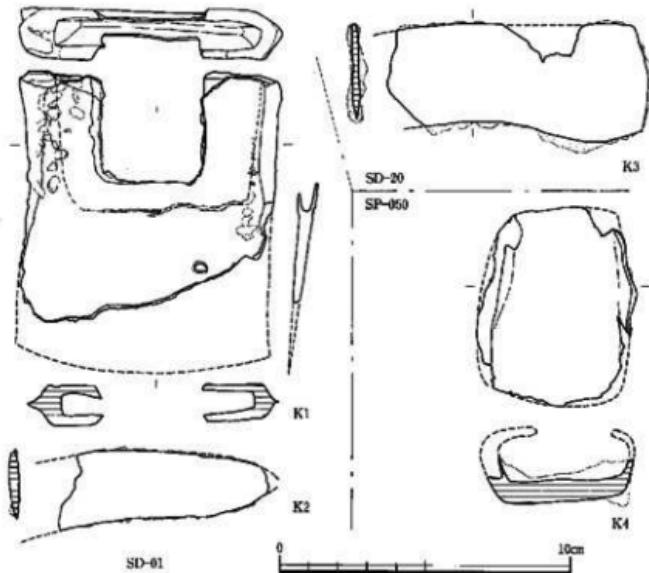


Fig. 1-28 出土金属器実測図

cm、残存高17.5cmである。61は東九州系のものか。63~65は脚部で、63・64には焼成前の穿孔がみられる。

**蛸壺 (55)**：砲弾形をなし、器面はヘラ（指か）によるナデ調整で仕上げており、□縁下に焼成前の穿孔がある。口縁部は横円形を呈し、長径6.3cm、短径5.3cm、器高10.1cmである。

**器台 (66~76)**：胴上部で屈曲して受け部が開くもの（A型）、胴中央部が締まり受け部と底部径がほぼ同じもの（B型）に大別できる。B型は70・72・75で、他はA型。66がもっとも大きく、口径12.4cm、器高16.5cmである。

**支脚 (77~80)**：77は外面上部および内面がナデ調整、外面はハケ目調整が施されている。器表面は、78は叩きがみられ、79はヘラナデ後ハケ目調整、80はナデ調整が施されている。器高は12cm前後である。

## 2) その他の遺物 (Fig. 1-28・29・30)

本溝からは、土器のほかに青銅製鋤先・鉄鎌・石庖丁・土製投弾などの遺物が出土した。

**金属器 (K1・K2)**：K1は刃部が欠失しており刃部の形状は不明であるが、刃部が長く、刃部幅が袋基部幅と同じか広くなる可能性がある。袋基部幅9cm、袋基部内法幅7cm、袋基部内法長4.6cm、袋基部厚1.7cm、袋基部内法厚0.95cm、刃部長4+ $\alpha$ cm、刃部幅8.5+ $\alpha$ cm、刃部最大厚0.5cm、

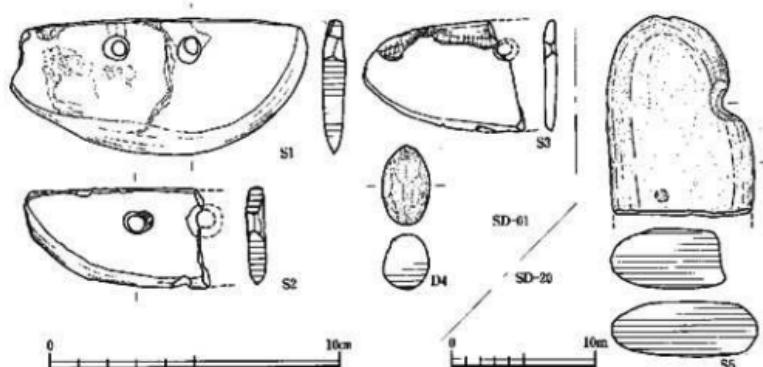


Fig. 1-29 出土石器・土製品実測図

K2は内湾気味の刃部をもつ鉄鎌で、残存長7cm、最大幅2.45cm、最大厚0.4cmである。

石器および土製品 (S1~S3・D4) : S1~S3は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石庖丁で、D4は土製投弾である。

以上、本溝からは多種多様な遺物が出土した。土器の大部分は弥生時代後期中葉から後葉のものである。3mの深さをもつ溝で、遺物はほとんど上部から出土しているが、底面出土の土器と時期差はない。弥生時代後期中葉から弥生時代終末期に近い時期まで溝の機能をもっていたと考えられる。

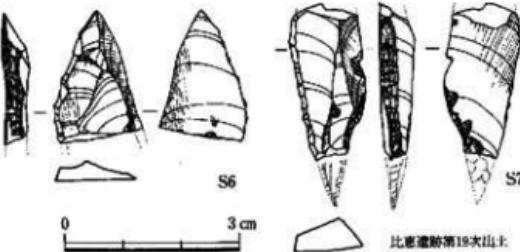


Fig. 1-30 出土ナイフ形石器実測図

## 5. その他の遺構と出土遺物 (Fig.1-2・28・29・30)

溝5条 (SD-03・07・20・24・25)、土壙1基 (SK-01) がある。SD-03は暗灰色土・黒褐色土が層をなしており、土師器壊・青磁碗などの細片が出土した。SD-25は出土須恵器から6世紀末頃の溝である。

SD-20・27は布掘りか。SD-20はN-9°-Wの方位をとり、両端に柱穴があり、中央部が浅くなっている。SC-06・21にみられる布掘り状掘り込みか。出土高壙 (56・57) から古墳時代

初頭のものである。K3は鉄鎌、S5は石杵の頭か。

SK-09は2.5×2.15m の平坦な床面をもつ袋状をなす土壇で、70cm前後の遺存である。出土土器から弥生時代中期後半のものである。

K4はSP-0050から出土した鉄斧である。

S6は遺構検出時に出土した黒曜石製のナイフ形石器で、基部は欠損している。S7は比恵遺跡第19次調査出土の黒曜石製ナイフ形石器である。

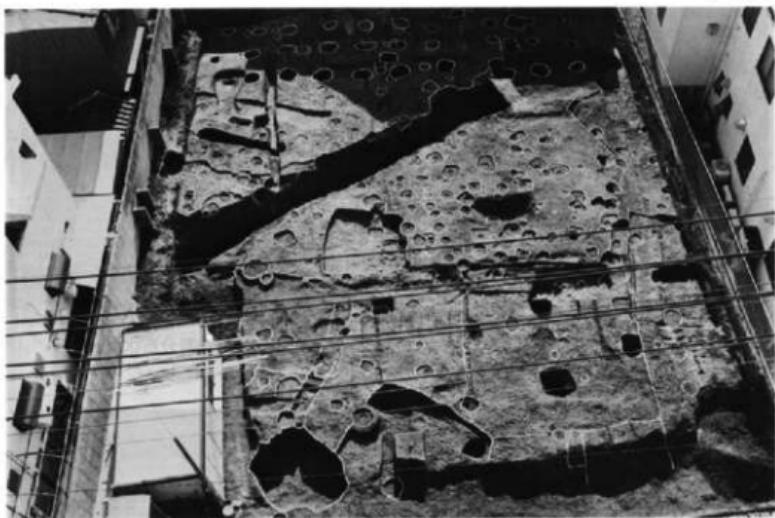
### III まとめ

本調査地は、400m<sup>2</sup>強の調査面積にもかかわらず各時代の遺構の遺存状態が良く、多大な成果を得ることができた。簡単に調査成果をまとめておくことにする。

N-56.5°-W の方位をもつ第1号溝(SD-01)は、検出面で幅2m 前後あり、鳥栖ローム層を掘り抜き八女粘土層の中ほどまで掘り、3m の遺存をもっており、断面形はY字形をなしている。溝北側壁には逆茂木状をなすと考えられる杭痕があること、那珂・比恵遺跡群が所在する那珂・比恵台地の西斜面に位置していることから、防禦用の溝で、環濠の外濠となる可能性がある。出土土器は弥生時代後期中葉から後葉のものが主体をなしているが、同時代終末期に近い時期のものがあり、約一世紀間機能を果たしたと考えられる。

古墳時代の前半期の竪穴住居址の布掘り状掘り込みはこれまで検出例がなく、今後の検出物を持ちたい。

第11～13号建物(SB-11～13)はN-27°-W の主軸方位をとり、SB-11・12は4m の間隔をとり桁行の東側の柱筋が通っており、SB-12・13は3.7m の間隔をとり梁行の柱筋が通っていること、建物規模など共通点が多く、一連の建物と考えられる。時期限定はできなかったが、古墳時代後期のものと考えられる。これまで比恵遺跡第7・8・13・39次、那珂遺跡第10・23次調査で、同時期の建物群が検出されている。比恵遺跡第7・13・39次調査検出建物は、ほぼ真北の主軸方位をとることから一体のもので官衙と考えられる。本調査地検出の建物を含め、他調査検出建物は比恵遺跡第7次調査検出建物と方位が異なっているが、比恵第39次検出建物と同規模をもっていること、各調査で主軸方位が少しづつずれているがほぼ近い方位をとることから、一連の官衙的意味をもつ倉庫と考えられる。この主軸方位の差は、比恵遺跡第7次等調査を含めて、時期差なのか、地形に左右されたものか、施設の意味合いが異なるのか、豪族の居館が混じっているのかは今後の課題といえよう。



1) 第18次調査全景（北東から）



2) 積穴住居址・建物分布状況



1) 第21号竖穴住居址完掘状况



4) 捣立柱建物群分布状况



2) 第23号竖穴住居址完掘状况



5) 第11号捣立柱建物検出状况



3) 第6号竖穴住居址完掘状况



6) 第12号捣立柱建物検出状况



1) 第1号溝完掘状況



2) 第1号溝遺物出土状態



31



30



6



18



26



24



17



19



24

3) 第1号溝出土變形土器



第 1 号 溝 出 土 土 器

## 第2章 第28次調査報告



## I はじめに

### 1 調査に至る経過

1989（平成元）年、株式会社西日本住センターから本市に対して博多区東光寺町309番、312番、313番、314番における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前発査願書が申請された。申請地は周知の遺跡であるところの「那珂遺跡群」に含まれており、その東側約100mには東光寺剣塚が位置し、1988年度に調査が行われている。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて1989年10月5日に試掘調査を実施した結果、地表下35cmで地山面が現れ、その面で遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、現状での保存は困難であり、やむを得ず記録保存のために発掘調査を行う運びとなった。株式会社西日本住センターと福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する委託契約を締結し、発掘調査は翌1990年5月10日から6月9日まで行われた。

### 2 調査の組織

調査委託 株式会社西日本住センター

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝（前任） 埋蔵文化財課長 折尾学

第2係長 柳沢一男（前任） 第2係長 塩屋勝利

庶務担当 松延好文（前任） 古田麻由美

調査担当 試掘調査 吉留秀敏

発掘調査 佐藤一郎

発掘作業・資料整理協力者 大村芳雄 金子元 神尾順次 坂本俊彦 長友洋典 浜地富男

福澤山次郎 三浦義隆 相川和子 徳永ノブヨ 平野志津江 藤野邦子 藤村佳公

恵 丸山信枝 萬スミヨ 脇坂レイコ

飲料水の確保等に関して、中原志外顕氏をはじめとする地元の方々のご理解とご協力が得られ、調査が円滑に進み無事終了しました。ここに深く感謝します。

## II 発掘調査の概要

調査は5月10日にバックホーによる表土剥ぎから開始した。調査区域は以前は民家として利

用されており、遺構は地表下約50cmで検出したローム層上面で確認された。排土置き場を調査区域内で確保しなくてはならない都合上、打つ手替えして調査を行うこととなり、東半部分から着手した。5月12日より作業員を投入し、機材搬入・休憩場所設営の後、遺構の検出に入り、15世紀後半から16世紀前半にかけての矩形の溝1条、地下式土壙1基等を検出した。遺構の写真撮影、実測の後、東半部分の埋め戻しを行い、西半部分に置かれていた休憩場所のユニットハウスを移動し、西半部分の表土剥ぎにかかり、6月1日から遺構の検出に入った。西半部分の道路際は側溝によって擾乱を受けており、検出した遺構は18世紀代の溝1条にとどまつた。写真撮影、実測の後、埋め戻しにかかり、調査は6月9日に終了した。

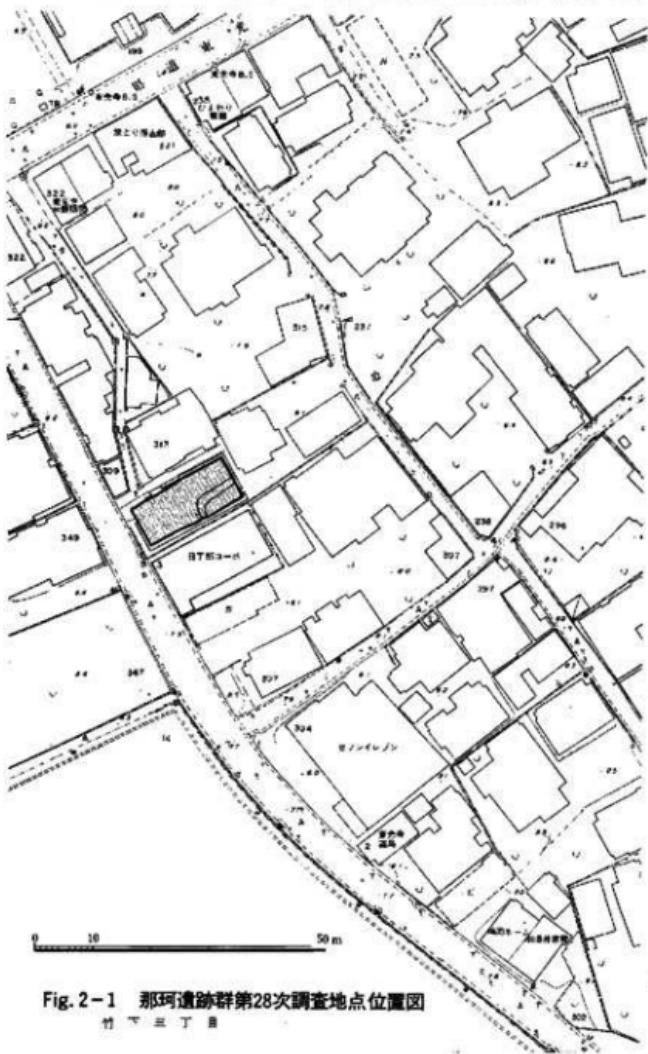


Fig. 2-1 那珂遺跡群第28次調査地点位置図

竹下三丁目

### III 遺構と遺物

#### 1 検出遺構

##### 地下式土壇

SK-03 (Fig. 2-3・8)

調査区中央のやや北寄りで、矩形にめぐるSD-01溝と重複して検出された。溝の外寄りの肩に堅坑を穿ち、溝と直交する方向の外側に壙室を設ける。壙室の天井部は崩落しているが、周壁はほぼ直線的にすばまる。底面の全長2.3m、壙室は1.9×2.3mの不整指円形を呈し、底面のほぼ中央に径70cm、深さ10cmの浅いピット状の落ち込みがある。堅坑は上端径0.80m、下端径0.70m、深さ0.7m測る。壙室内から土師器すり鉢片、瀬戸・美濃系天目焼片、堅坑内から青花皿口縁部片 (SD-02溝出土のものと接合) が出土した。

##### 溝

SD-01 (Fig. 2-4)

北東から南西方向へ傾斜し、ほぼ南北方向へ矩形に屈曲する溝である。延長9.5m検出した。溝の幅1.1~1.7m、深さ50~70cmを測り、断面は逆台形状を呈する。埋土の堆積状況はFig. 2-4に示すとおり、上層は暗灰褐色

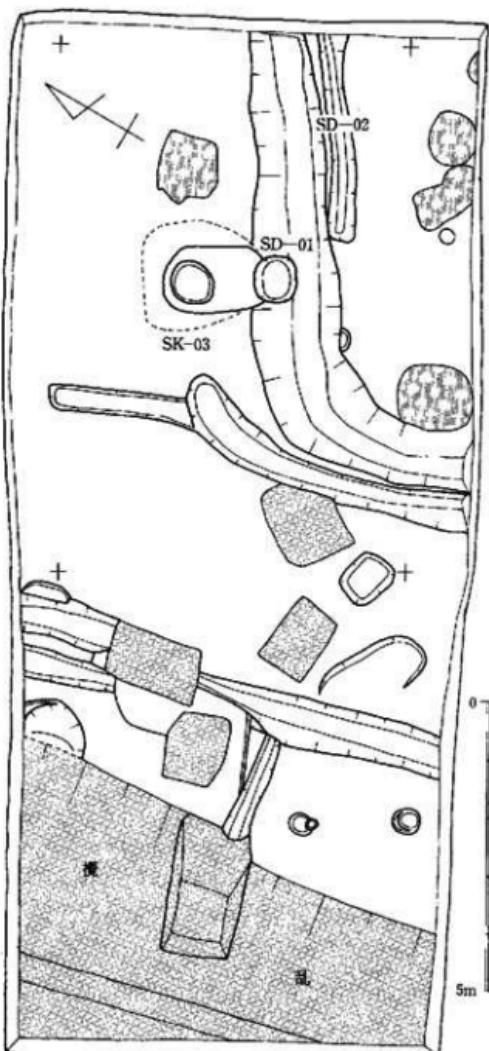


Fig. 2-2 那珂遺跡群第28次調査遺構配置図

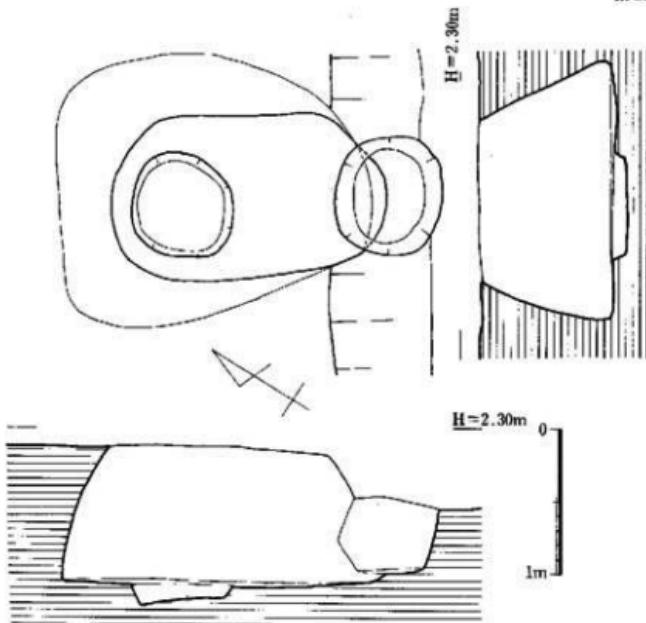


Fig. 2-3 地下式土壤実測図

土、下層はローム粒を含む暗灰褐色土からなる。

SD-02 (Fig. 2-4)

調査区の北東隅からSD01溝に接して、北東から南西方向へ傾斜する溝である。延長5.6m検出した。溝の幅60~80m、深さ30~50cmを割り、断面は逆台形状を呈する。埋上の堆積状況はFig. 2-4に示すとおり、ローム粒を含む暗灰褐色土からなり、SD-01溝上層の下面で検出された。

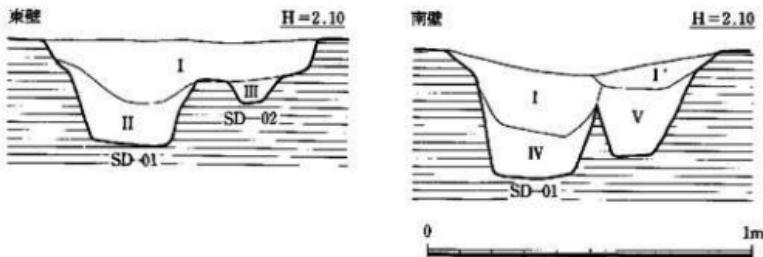


Fig. 2-4 溝土層断面図

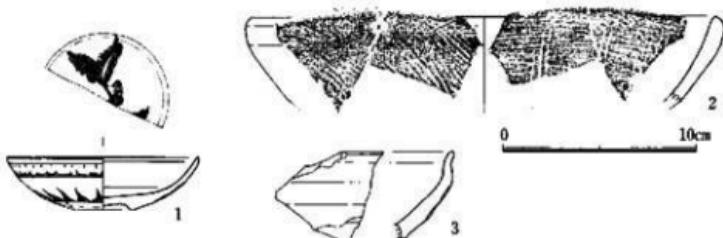


Fig. 2-5 出土遺物実測図

## 2 出土遺物

### SK-03出土遺物 (Fig. 2-5・11)

**土師器** すり鉢(1)胎土には細かい砂粒を多く含み、焼成は良好である。外面は刷毛目、口縁端部は横ナデ、内面は刷毛目を施した後、4本単位の条線を入れる。

**瀬戸・美濃系天目碗(2)**口縁部下から直に立ち上がり、端部は外反する。体部下半まで施釉される。

### SD-02出土遺物 (Fig. 2-5・11)

**青花** □(3)口縁部をかるく内湾気味におさめる基筒底の皿である。外面は口縁部に波瀾文帯、体部に蕉葉文、腰部に界線を配し、内面は口縁部下、体部と底部の境に2条の界線、見込みに花鳥を配す。疊付は露胎である。復元口径10.0cm、器高2.7cm、底径2.8cmを測る。

## IV 小 結

**地下式土壙の復元** 今回の調査で検出されたSK-03地下式土壙は壙室の天井部が崩落し、SD-02溝を掘り下げる途中に埋土中で堅坑の掘り込みが確認され、SD-01の埋土との境が不明瞭であったため、堅坑と壙室を繋ぐトンネル状の通路部を捉えることができなかった。壙室の天井部は崩落しているが、直線的にそばまる周壁は底面から0.95m残存し、高さ1.5mほどのドーム状をなすと推定される。

**地下式土壙の分布** SK-03地下式土壙はSD-01溝が埋没した後に築造されたものであるが、溝の外寄りの肩に堅坑を穿ち、溝と直交する方向の外側に壙室を設けている。同じ様な例として、

として、那珂遺跡群が位置する御笠川・那珂川にはさまれた、牛頭山地の麓から北に伸びる諸岡台地上の諸岡遺跡第10次（旧称諸岡I）調査で検出された地下式土壙2基があげられる。SD-02溝が埋没した後に堅坑を穿ち、傾斜する方向に壙室を設けている。諸岡遺跡第14・17次（旧称諸岡館址A・B）調査では南・西辺で館址を取り巻くとみられる土壙・溝が検出され、それに伴って地下式土壙6基が検出されている。<sup>注1</sup> 地下式土壙は土壙内縁に堅坑の入口部を穿ち、土壙に直交する方向に壙室を設けている。その後の第18次調査は土壙の南西側に位置するが、土壙の外側で地下式土壙5基が検出されている。<sup>注2</sup> 地下式土壙の南西側では布掘りの掘立柱建物とみられる遺構SX-100が検出されている。掘り方内からは明代の青花磁片が出土している。遺構の一部を調査しただけでその性格は捉えがたいが、土壙内の建物が掘り方の径30~60cmの不整円形の柱穴から構成されるのに対し、土壙の南西コーナーに配されるこの建物は堅牢に築造されている。物見櫓に類する機能を有したものではないだろうか。そして、遺構の北・東辺に位置する地下式土壙群も土壙と同様にその遺構に伴い、防御的機能をもつのではないか。

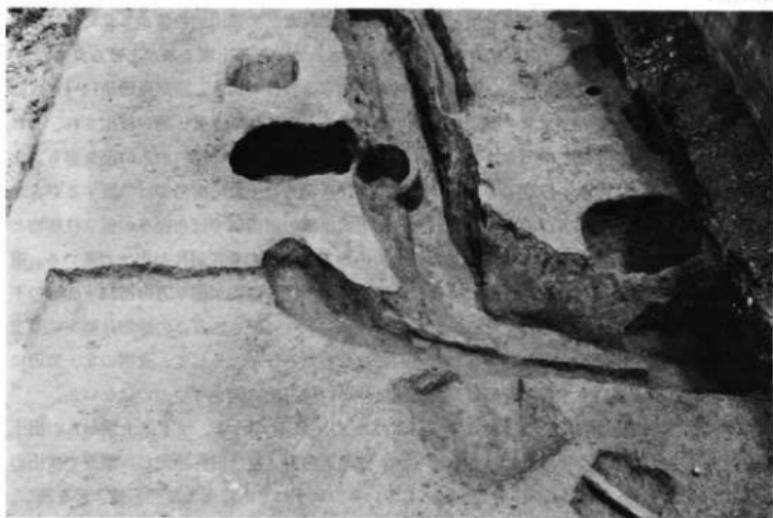
**地下式土壙の出土遺物** 今回の調査で検出されたSX-03に限らず、地下式土壙からの出土遺物は井戸・墳墓のように多量にはみられない。諸岡遺跡第4次（旧称諸岡C）調査で検出の地下式土壙からは土師器小皿・杯数点が出土している。いずれも内底部まで回転横ナデを施し、底部は糸切り離して板状圧痕はみられない。第1号地下式土壙（報告では地下式横穴）床面直上出土の小皿は口径7.4cm、器高1.0cm、底径5.8cm、第2号地下式土壙埋土内出土の杯は口径10.8cm、器高1.5cm、底径8.8cm、第3号地下式土壙崩落土中出土の杯は口径11.6cm、器高2.7cm、底径6.8cmを測る。諸岡遺跡第5次（旧称諸岡D）調査で検出の第6号地下式土壙崩落土中出土の土師器杯は口径11.9cm、器高2.3cm、底径9.0cmを測る。諸岡遺跡17次調査で検出のSK-036崩落土中からは土師器小皿が出土し、口径8.2cm、器高1.7cm、底径5.8cm。SK-037崩落土中からは土師器杯が出土し、口径13.0cm、器高2.2cm、底径9.2cmを測る。いずれも内底部の強いナデではなく、底部は糸切り離して板状圧痕はみられない。SK-039崩落土中からは細く鋭い高台をもつ白磁の端反り皿が出土している。第18次調査検出のSK-56からは土師器杯が出土し、口径10.7cm、器高2.2cm、底径6.0cmを測る。SK-59からは土師器小皿が出土し、口径7.8cm、器高1.6cm、底径5.9cmを測る。以上述べてきた遺物の出土状況は、遺構の時期を求めるには決め手に欠けるが、これらの遺物の時期は15世紀後半から16世紀前半を中心とした時期におさまる。

註1 福岡市教育委員会『板付周辺遺跡調査報告書(7)』1980

註2 福岡市教育委員会『諸岡遺跡－第14・17次調査報告』1984

註3 福岡市教育委員会『板付周辺遺跡調査報告書(2)』1987

註4 福岡市教育委員会『板付周辺遺跡調査報告書(2)』1975



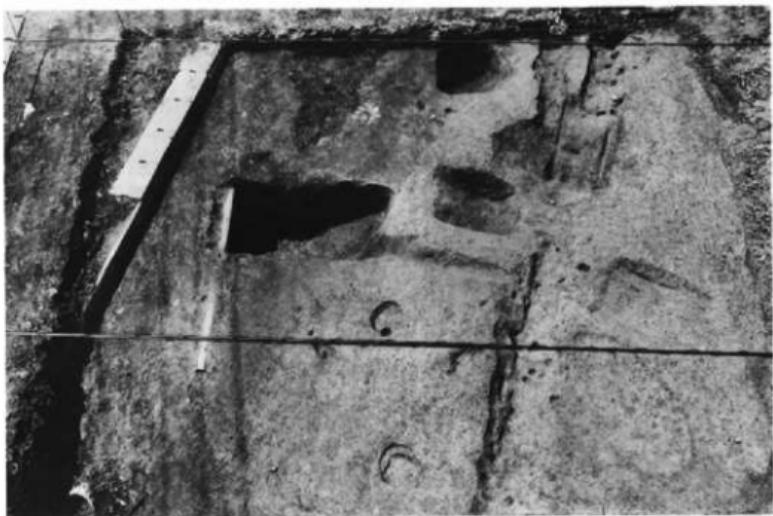
1) 調査区西半部（西から）



2) 調査区西半部（南から）



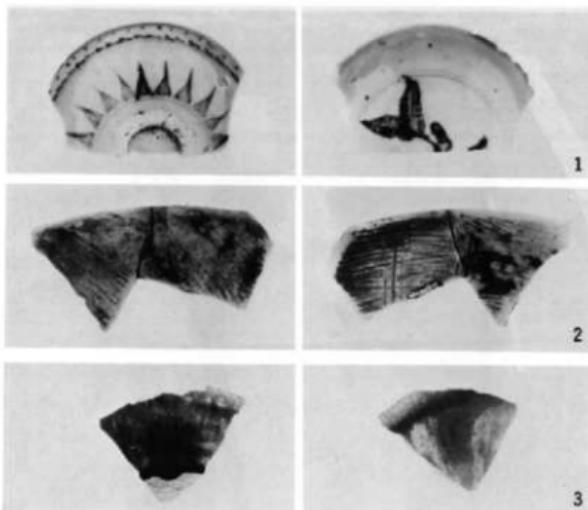
1) 第3号地下式土壤（南から）



2) 調査区東半部（南から）



1) 調査区東半部（北から）



2) 調査区出土遺物

### 第3章 第30次調査報告



遺構検出風景（東より）

## I 序 説

1990年9月、広田信一氏から博多区那珂一丁目462-1について埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、申請地が那珂遺跡群にあたり、しかも予定建築物が地表下に与える影響が大きいことから同年10月3日に試掘を行なった。試掘では、表土下20cm程で遺物包含層となり、溝や柱穴が確認されたため、文化財保護法57条2項に則って発掘調査が必要との判断を示した。その後、同年12月に調査を行なうとの方向で協議が整い、両者間で契約が交わされた。発掘調査は、12月2日から15日にかけて実施、資料整理は平成三年度に行なうことになった。

### 調査の組織と構成

調査委託 神奈川県鎌倉市山崎2507番地

広田信一

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝（前任） 折尾学 同第2係長 柳沢一男（前任）

塩屋勝利 文化財主事 横山邦継 事前審査担当 吉留秀敏

庶務担当 松延好文（前任） 吉田麻由美

調査担当 常松幹雄 整理補助 古川千賀子

調査参加者 石川洋子 大橋善平 岡部直美 川崎道子 寒田慧 小城信子 塚副義一郎  
西本スミ 野口ミヨ 日尾野典子 広田熊雄 山崎美枝子



完成した店舗（92年春）

## II 調査の概要

調査地は、那珂八幡古墳の周濠の東に位置する標高約9mの部分である。12月2日にバックフオードで表土剥ぎを行ない、統いて遺構検出を行なった。確認された遺構は、掘立柱建物(SB-01)、古墳時代後期の土壤基(SK-01)、弥生時代後期の井戸跡(SE-01・02)などがある。またこの他に、古墳時代後期の不整形の溝と土壤が切り合った性格不明遺構(SX-01)がある。調査区の北隅にある方形プランの遺構は、埋土にしまりが無くまとまった遺物も認められなかったので遺構としなかった。この他にも柱穴があるが、建物の支柱等として位置づけるまで至らなかった。

調査面積は80m<sup>2</sup>と限られた範囲であるが、掘立柱建物の柱穴には、朝鮮系無文土器が埋置されており興味深い。井戸に廃棄された土器は、後期終末段階を下限としており、那珂八幡古墳の造営を考える時、考慮すべきであろう。

調査は、表土剥ぎから埋戻しまで二週間で終了した。師走の慌しいなか、撤収した機材はそのまま第31次調査のユニットハウスへ運び込んだ。

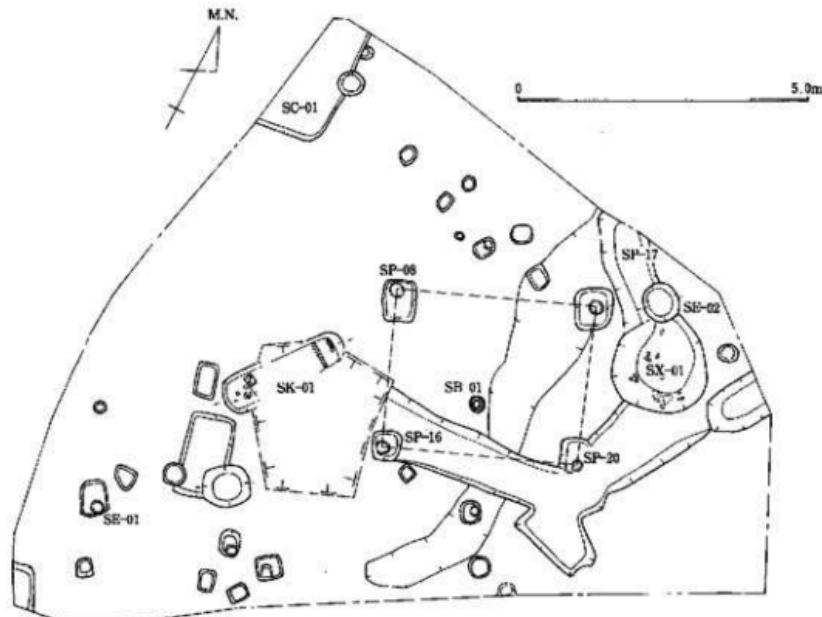


Fig. 3-1 第30次調査地点遺構配置図 (縮尺 1/100)



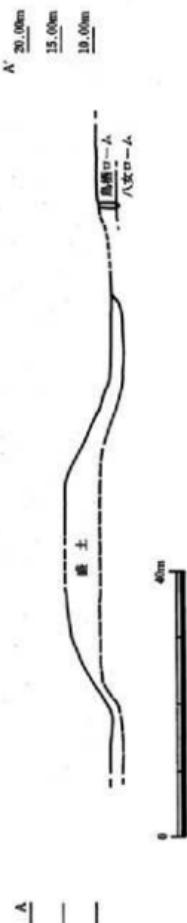
Fig. 3-2 調査区と那珂八幡古墳との位置関係（縮尺 1/600）

## 調査区の位置と環境 Fig. 3-2

30次調査区は那珂八幡古墳の墳裾まで20m程の距離である。那珂八幡は、1984・85年度の重要遺跡確認調査で盛土の状態が一部明らかになつた。<sup>(1)</sup> Fig.3-2は、概報の土層図をもとに今回井戸の掘削によって得られた情報を合成した断面図である。那珂八幡については、全面的な調査が行なわれているわけではないので、古墳造営前後の隣接する遺構の分布に注目すべき点が多い。

## 註

- (1)井沢洋一・米倉秀紀(編)「那珂八幡古墳」「福岡市埋蔵文化財調査報告書第141集」福岡市教育委員会、1986年。



第30次調査区より那珂八幡古墳と東光寺剣塚古墳をのぞむ（東より）

### 掘立柱建物 (SB-01) Fig. 3-3

調査区のほぼ中央で、方形プランの掘り方をもつ掘立柱建物 (SB-01) が検出された。建物は、桁行3.3~3.4m、梁行2.7m をはかり、各々の延長上に掘り方が認められないことから1×1間と考えられる。柱痕跡は、径24cm程で、埋土は、北東の掘り方を例にとると、裏込は、黒色土にロームブロックが混ざったものであった。北西の掘り方は、全体的に炭化物がつまっていた。南側の2つの掘り方は、古墳時代の遺構によって削られていたが柱痕跡を確認できた。

時期の判断材料となる遺物は、Fig.3-4に示す北西の柱穴 (SP-08) のみで出土しており、以下SP-08の状況を主体に解説を行なう。SP-08は、遺構検出面で、柱痕跡を見出せたため、長軸に立ち割りを行なった。柱穴は、北側に向ってプランがのびており、底から10cm程のレベルで、1のコップ型の土器と、口縁に粘土紙を巻いた小甕?が出土した。柱穴内に完形に近い土器があるのは不自然であることから、北東方向に柱抜きを行なった後で土器が置かれたと考えられる。

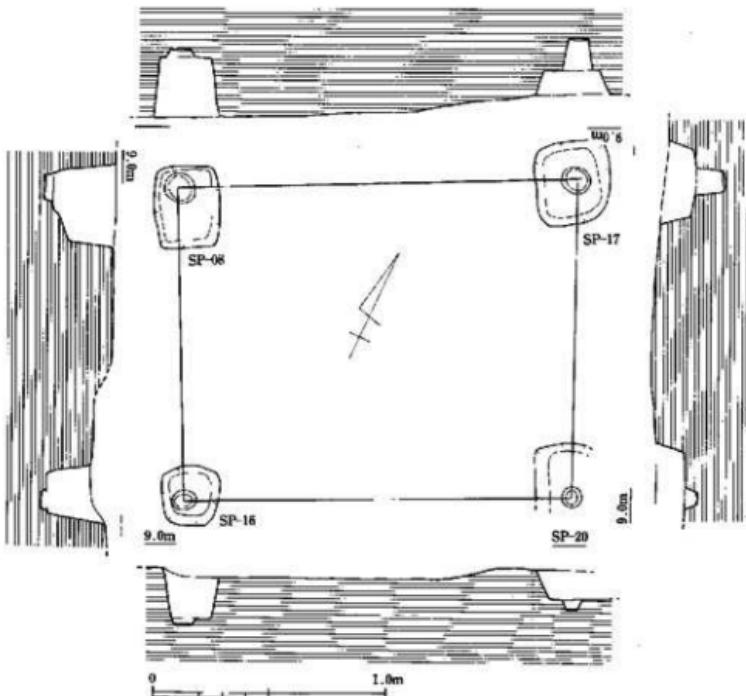


Fig. 3-3 掘立柱建物 (SB-01) 実測図 (縮尺 1/50)

## 出土遺物 Fig. 3-4

SP-08 1は手捏ね土器である。器壁の摩滅が著しく調整は不明であるが内底はナデで、底部はやや厚めである。胎土は石英、雲母を含むが特に石英は非常に多く混入されている。色調は暗灰黄色を呈する。2は小型の甕で、口縁部に粘土帯を回らしている。器壁の摩滅が著しく、外底をナデ、口縁をヨコナデ、体部内面上半をヨコナデの後タテ方向にナデている。体部下半はヨコナデでやや脛が張り出している。胎土は石英、長石など径1mm前後の砂粒を多く含む。色調は暗褐黄色を呈する。器壁には押圧痕と思われる痕跡が二ヶ所にみられる。3は甕のII縁部破片である。断面は鋸先形を呈し、口縁下に突唇が回る。推定口径は43.0cmである。

2の甕は、在来の弥生土器の系統上に見られない形状を呈している。粘土帯甕という点では朝鮮系無文土器として位置づけられる。朝鮮系無文土器については後藤直氏の分類に従えば、本例は粘土帯が薄い長楕円形の断面を呈することからIII類にあたる。しかし氏も指摘するように、細分すれば一点一類型になることさえあるよう、器種の大小によってもかなりのバリエーションが見込まれる。

類品としては、韓國慶尚南道の勒島住居跡（8号）に器高や粘土帯の様子に共通するものがある。<sup>1)</sup> 8号住居跡は、北部九州の須恵式併行に比定されている。本例は3の中後半の土器片が共存しており、上限の時期と捉えておきたい。SP-16・17・20からは弥生土器の細片が出土している。17からは流れ込みと思われる須恵器細片や丹塗り土器の破片が出土している。

## 註

- (1)後藤直「朝鮮系無文土器再論」「東アジアの考古と歴史 中巻」所収、同朋社、1987年。
- (2)安在啓・鄭澄元「勒島住居址」「釜山大学校博物館遺跡調査報告第13輯」、1989年。

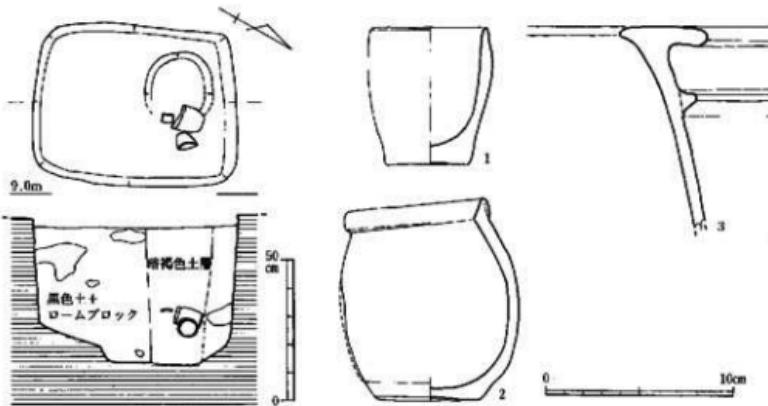


Fig. 3-4 柱穴 (SP-08) 実測図 (縮尺 1/50) と出土遺物 (縮尺 1/3)

井戸跡 Fig. 3-5

第1号井戸 (SE-01)

調査区の南西に位置する。平面形は橢円形を呈し、長径80cm、短径70cmをはかる。覆土はロームブロックを層状に挟む褐色土で、底部に近くにつれて黒色を帯びる。検出面から2mほどで、長径1mにまで抉れる。標高6.1mで、鳥栖ローム層と八女ローム層との境となる。床面のレベルは5.67mである。

出土遺物は、まとまっていたわけではなく、遺存も良くない。井戸が使われなくなつて廃棄あるいは混入したものと考えられる。

出土遺物 Fig. 3-6

1・2は甕で、1は上半部を残存する。内外面ハケ目調整で口縁部はヨコナデである。口縁端部には植物繊維状の圧痕がある。内面には粘土の繊目がみられる。外面は煤が多量に付着している。2は、「く」字状口縁の甕で、胴部上面に重心をもつ。底部は不安定な平底を呈す。全体的にハケ目調整であるが、底部はナデで、底部と胴部の境、口縁部は横方向のナデである。内面のハケ目は右上がり、外面はタテ方向に施されている。3の鉢は、不安定な平底を呈している。調整は外面はハケ目、口縁部付近には爪圧痕がみられる。内面は上半がナデ、下半がこてあてのような痕がある。4は手捏ね土器である。口縁部を欠き、全体の約1/3が残存する。調整は主にナデで体部外面はハケのようである。5は無茎式の磨製石錐で、先端部を欠いている。粘板岩を素材とし弥生前期末から中期初頭にかけての時期に比定される。この他に突帶のある甕や鉢の破片が多く出土している。



第1号井戸掘り下げ風景（南より）

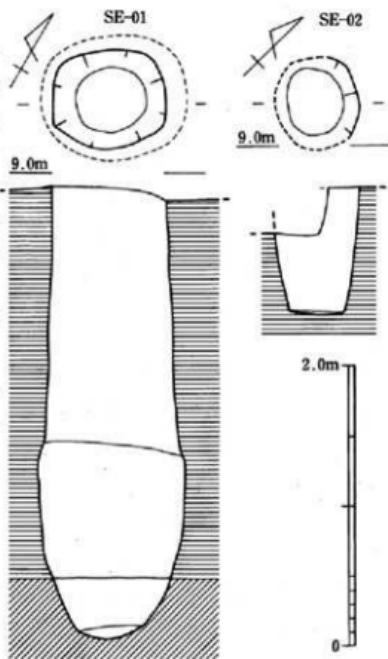


Fig. 3-5 第1・2号井戸実測図 (縮尺 1/40)

## 第2号井戸 (SE-02)

調査区の東隅に位置する。平面形は円形を呈し、径60~70cmをはかる。覆土は、黒色の粘質土で、底に近くなるにつれて温氣を帯びる。検出面から90cmで底に至ることから、漏水ではなく、雨水などの溜り水を利用するものと考えられる。出土した土器は、底部付近にあったもので、廃棄されたと思われる。

## 出土遺物 Fig. 3-6

6は算盤玉状の偏球形の胴部をもつ長頸壺である。口頸部を欠損する。外面の器壁は磨滅しているので調整は不明であるが、内面は胴部上半に指圧痕がみられ中位をヨコナデ、下半をハケ目調整している。丁寧なつくりで、外底部には黒斑がある。

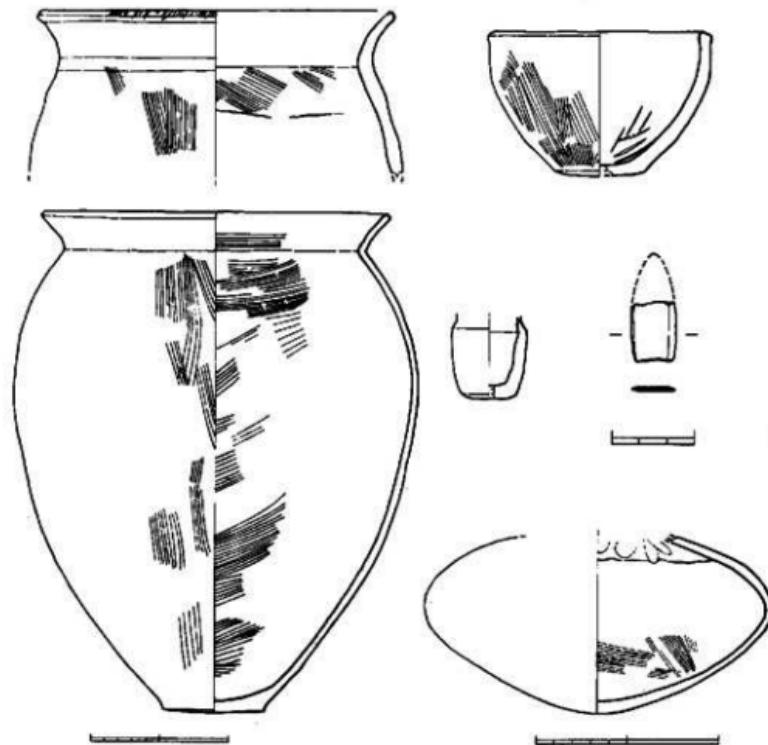


Fig. 3-6 第1・2号井戸出土遺物実測図 (縮尺 1/2, 1/3, 1/4)

### 第1号土壙墓 (SK-01) Fig. 3-7

調査区の中央部で検出された古墳時代後期の土壙墓である。中央部を爪付きのバックフォーで擾乱を受けており痛々しい。掘り方は、上面で長軸2.3mをはかり、幅は西側が広いため頭位と考えられる。長軸に直交する方向に、東西各々に溝が掘られている。これらの溝は、位置的には、木棺の小口とするには無理がある。移動式の複棺を網で持ち上げながら安置し、網を取り取り易くするための支えを置いたのなら、西側のように10cm近くも掘り下げる必要はない筈である。

須恵器は、西側で高杯・壺・蓋、東側で、杯が検出された。足元の杯は床面に立てかけられた状態で、頭位の器種は、床面から30cm程上部に位置していた。削平をうけているため上部構造は不明であるが、埋葬時の取扱いの違いを示すと考えられる。

同時期 (III b) の類例として飯倉C遺跡の土壙墓があげられる。頭位、足位を決めかねるが、遺物の出土状況に、両側に分かれて検出されていることや、レベルが床面とやや浮いた面にあるなど共通点が見出せる。

#### 註

(1)山崎龍雄「飯倉C遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第258集』福岡市教育委員会、1991年。

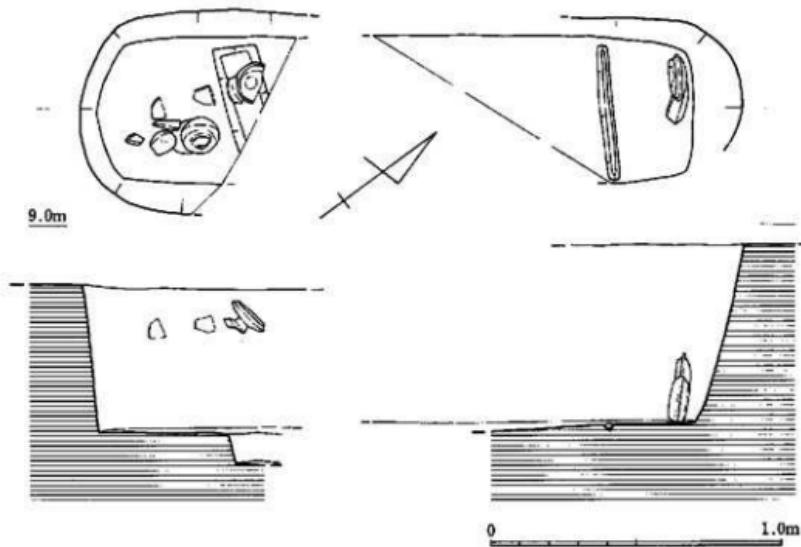


Fig. 3-7 第1号土壙墓 (SK-01) 実測図 (縮尺 1/20)

## 出土遺物 Fig. 3-8

須恵器が6点出土した。1の杯蓋の外底は約1/2回転ヘラ削りで体部と口縁部の境は広く浅い沈線がみられる。口縁は端部をやや外湾し、内側に段がつく。天井部には同心円状のあて具痕がある。2は1と対になる杯身で口縁は直に立ち上がる。外底1/2を回転ヘラ削りしている。内底には1と同じく同心円状のあて具痕がみられる。その圧痕は繩目のようにみえる。3は杯身で口縁は内傾気味に立ち上がる。外底を約1/2回転ヘラ削りで内底には同心円状のあて具痕がみられる。1~3は土壤の北東側より出土した。4~7は短頸壺で、4は底部を回転ヘラケズリ、体部にカキ目を施している。5は杯蓋で鉤状のつまみをもつ。生焼けで淡褐色黄色を呈する。口縁部を欠損。6は高杯で、口縁は内傾しながら立ち上がり端部は先細りする。脚部は短かく、ゆるやかな段になり端部は外反する。またこの高杯の特徴は脚部の内面と杯部下半の外面の表面が茶褐色を呈している。一見、赤色顔料を塗布したかのようであるが、福岡市埋文センターの本田光子氏に遺物を見ていたいたところ、焼成時に十分還元されなかつたため胎土中の鉄分が器壁に付着したのではと御教示を受けた。7は口縁端部が内湾する。体部中位~底部にかけて回転ヘラ削りを施す。4~7は土壤の西側(頭位)で出土した。

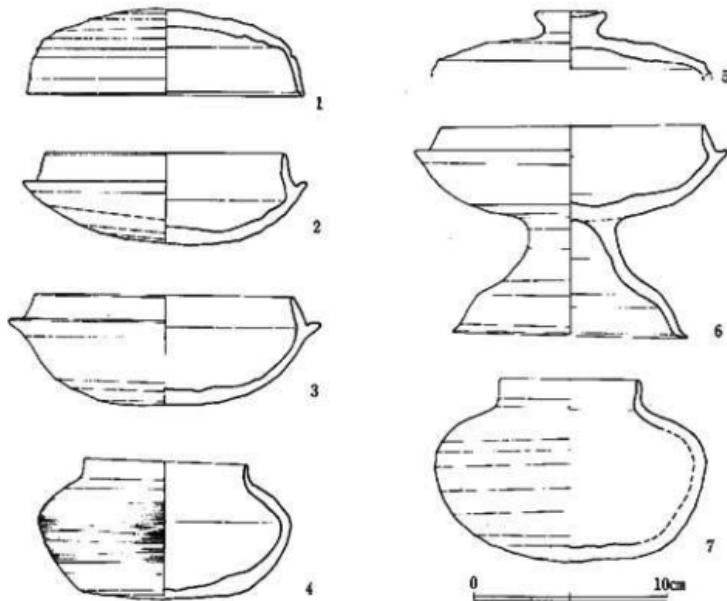


Fig. 3-8 第1号土壤墓出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

性格不明遺構 (SX-01) Fig. 3-9

調査区東側の土壤状の落ち込みでは、須恵器や土師器片がまとまっていた。不整形の溝との先後関係は平面プランでは不明であったが、SX-01として説明する。遺物が集中していた落ち込みでは、下図に示すように床面から浮いた状態で出土した。埋土は暗褐色で、遺物は流れ込んだ状態である。SK-01に関連があるのかもしれない。

出土遺物 Fig. 3-10

SX-01出土の須恵器は杯の口径が11~12cm位とやや小型で、またヘラ配号がみられる。1の杯蓋は外底の約1/2を回転ヘラ削りする。天井部下面にヘラ記号あり。2の杯身は外底の約1/2を回転ヘラ削りする。口縁は内傾し立ち上がる。外底にヘラ記号あり。3の杯身は2と比べ口縁部の退化が著しく、底部もやや平らになっている。外底1/3を回転ヘラ削りする。ヘラ記号

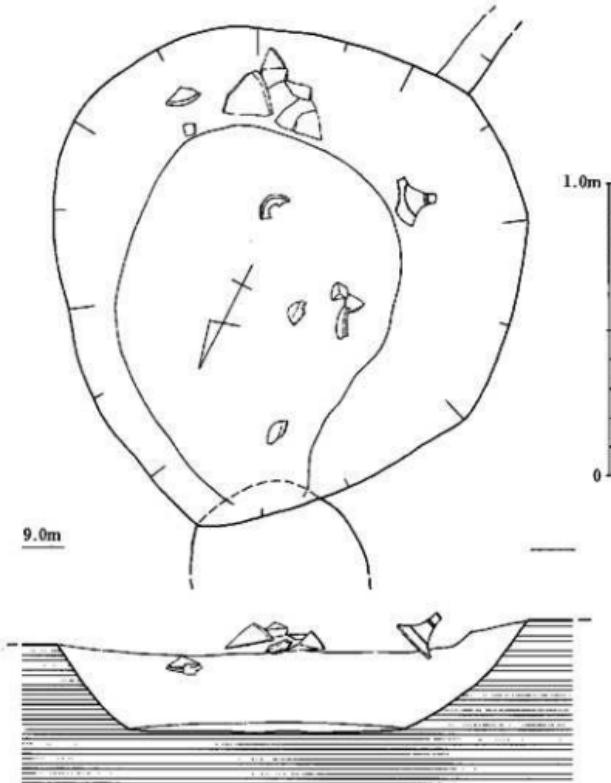


Fig. 3-9 SX-01 実測図 (縮尺 1/20)

あり。4の杯身は底部を欠損する。口縁端部をやや外湾する。器壁は厚めである。焼成は軟質で淡褐黄色を呈する。高杯の杯部となる可能性もある。5は短頸壺で、体部上半に浅い沈線が二条めぐる。頸部と体部にカキ目を施している。外底に二本線のヘラ記号がある。6は高杯で脚部のみ残存する。脚部上半にカキ目、中位と裾部に沈線あり。焼成は硬質であるが淡黄褐色を呈する。脚部から裾部にかけてヘラ記号あり。

その他の遺物 Fig. 3-11 1はSC-01より出土。土師器の鉢で、平底で体部下半は外湾ぎみに開き口縁は直に立ち上がる。器壁は厚く、調整は外面をハケ、内面上部をヨコナデで底部は内外ともナデである。2~4は包含層より出土。2・3は砥石、4は敲石である。

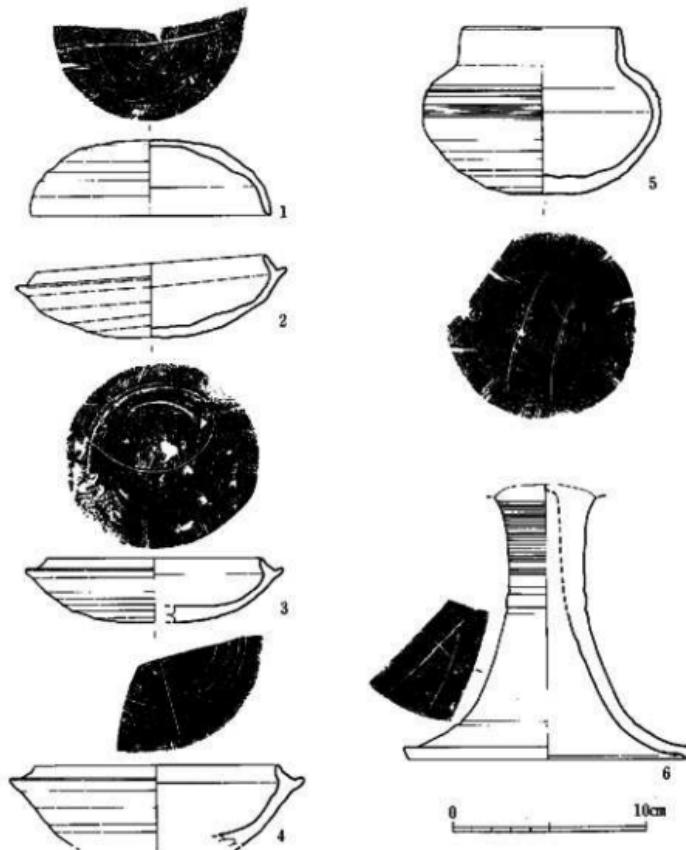


Fig. 3-10 SX-01 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

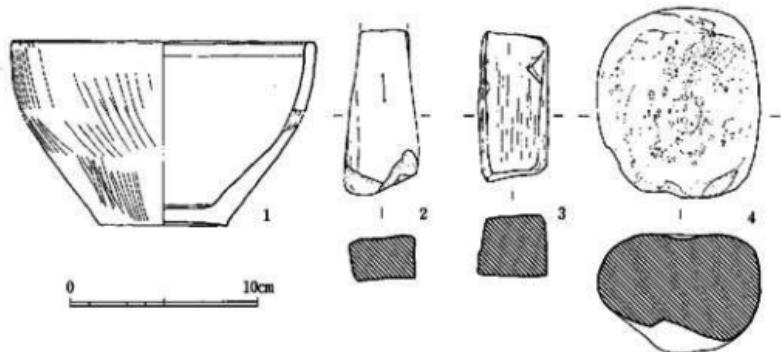


Fig. 3-11 その他の遺物実測図 (縮尺 1/3)

#### IV 小 結

小面積の調査であったが、弥生から古墳時代にかけての遺構を捉えることができた。井戸は1・2号ともに弥生後期終末に比定される。掘立柱建物は弥生中期後半を上限としており、柱の抜き痕に朝鮮系無文土器を入れている点に注目される。Fig.3-12に勒島住居跡の類品を転載したが、器形は2に近い。しかし器面調整や、粘土帯の接ぎ目など比較検討が必要である。

1号土壤基は、III a 期（6世紀中頃）を主体とし、高杯などIII b 期に下がる傾向も認められる。SX-01の遺物は、III b 期からIV期にかけての特徴が認められる。

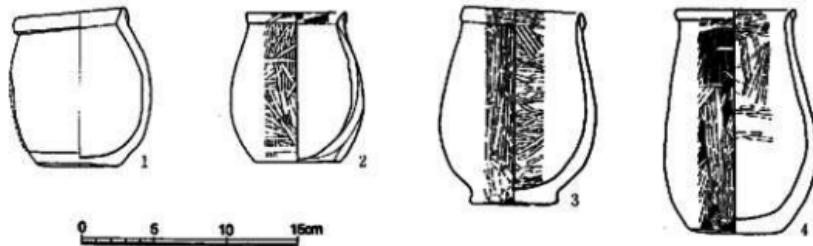


Fig. 3-12 粘土帯壺の比較 <1.那珂第30次・2~4勒島8号住居跡IV層> (縮尺 1/4)



1) 第30次調査区全景（南より）



2) 挖立柱掘り方 (SP-08) (東より)



1) 土壙墓 (SK-01) (南西より)



2) 土壙墓 (SK-01) (南東より)



1) 第1号井戸 (SE-01) (南より)



2) 性格不明遺構 (SX-01) 遺物出土状況 (東より)



Fig. 3-4の2



Fig. 3-6の6



Fig. 3-8の1



Fig. 3-8の5



Fig. 3-8の2



Fig. 3-8の6



Fig. 3-8の7



Fig. 3-8の7

第30次調査出土遺物

## 第4章 第31次調査報告



完成した店舗付共同住宅（92年春）

## I 序 説

1990年7月、西田孝子、西田浩三氏より博多区大字那珂字沼口802-15、802-1について埋蔵文化財事前審査願が提出された。これを受けた埋蔵文化財課では、申請地が那珂遺跡群にあたり、しかも予定建築物が地表下に与える影響が大きいことから同年8月7日に試掘を行なった。試掘は、道路面の擁壁が高くバックフォーの投入が困難なため手作業とし、3ヶ所のテストトレンチを設定した。試掘では、地表下35~38cmで土壤、柱穴が検出されたため、文化財保護法57条2項に則って発掘調査が必要との判断を示した。その後、同年12月に調査を行なうとの方向で協議が整い、両者間で契約が交わされた。発掘調査は、12月18日から翌年1月31日にかけて実施、資料整理は平成三年度に行なうことになった。

### 調査の組織と構成

調査委託 福岡市博多区博多駅南三丁目6番30号

西田浩三 西田孝子

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 柳田純孝(前任) 折尾学 同第二係長 柳沢一男(前任)

塙屋勝利 文化財主事 横山邦雄 事前審査担当 吉留秀敏

庶務担当 松延好文(前任) 吉田麻由美

調査担当 常松幹雄 整理補助 古川千賀子

調査参加者 石川洋子、大橋善平、岡部直美、川崎道子、窪田慧、小城信子、塚原義一郎、西本スミ、野口ミヨ、日尾野典子、広田熊雄、山崎美枝子

調査にあたっては、委託者ならびに施工にあたられた大気建設(株)代表取締役上野賢士郎氏、隣地にあたる那珂幼稚園の皆さんの協力をいただいた。



調査前の安全祈願

## II 調査の概要

12月18日からバックフォーで掘り下げを開始した。地表下30cm程で、弥生土器や須恵器が含まれた面にあたる。調査区の西側には、小壺を副葬する弥生時代の墓壙プランも確認されたため、以下は手作業で遺構検出を行なった。その結果、粘土や焼土の集まった部分を各々3ヶ所見出した。これは古墳時代の方形プランを有する住居跡の切合と考えられた。しかし切合を明確に識別できなかったので、遺物の出土地点を平板に記しながら徐々に掘り下げを行なった。

遺構の掘り下げは予定以上に手間取り、調査期間を一週間延長してもらい、ユニットハウスの下の遺構実測を終えたのは、1月31日である。

検出された遺構は、弥生時代の墓が、甕棺墓1基、木棺墓2基の計3基、古墳時代の住居跡4軒以上である。掘立柱建物は、現状の面積(123m<sup>2</sup>)では把握できなかった。

調査参加者の中、川崎道子さんが、91年7月に急逝された。10年近くにわたり発掘作業員を続けてこられたが、現場で世話をになった一人として冥福を祈りたい。

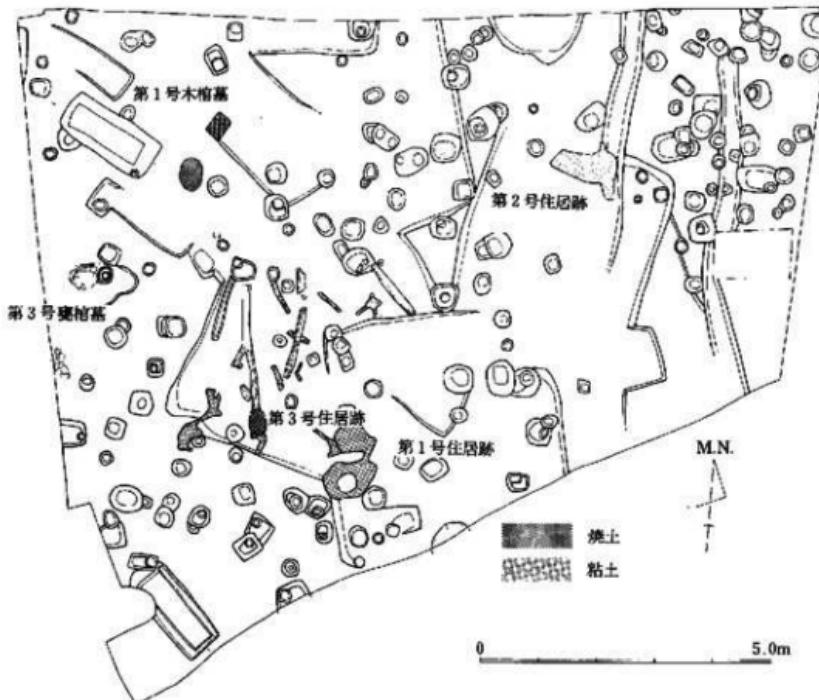


Fig. 4-1 第31次調査地点遺構配置図 (縮尺 1/100)

### 調査区の位置

道路台帳（K-11-25）に、31次調査区と1980年に調査された那珂沼口遺跡（歩道部分）の位置関係を下図に示す。小字名から那珂沼口と称されたが、現在は那珂遺跡群に包括される。



Fig. 4-2 那珂遺跡群第31次調査区位置図 (縮尺 1/400)

## 弥生時代の墓 Fig. 4-3

今回の調査で確認されたのは、甕棺墓1基と木棺墓2基の計3基である。調査区に南接する道路拡幅に伴う発掘では、2基の甕棺墓が出土している（Fig. 4-8）。その際のK-1（1号甕棺）の掘り方は、擁壁部分で再確認された。ここでは31次調査の甕棺を3号甕棺（K-3）とする。

1号甕棺の下蓋は、壺の形態を留め、胴部と底部の境目が明らかで、底の厚味も2cm程である。橋口編年ではK I a式となる。上蓋は、口縁部しか残っていないが、口縁の内面は肥厚せずに外湾するタイプで、K I b式よりも下らない。

2号甕棺は、上蓋と下蓋の約半分が削られてしまっている。底部の境目が不明瞭な点を除けば、1号棺の下蓋と同様である。

3号甕棺墓は、過度の攪乱のため主軸が東西方向をとるなど他の2基の甕棺や木棺墓と異なる点がある。掘り方は不明で、傾斜角も緩いことから原位置を留めていない可能性がある。3号甕棺は、胴部下半から底部にかけて遺存する。胎土中に石英の粗粒、長石、赤色の焼粉を多く含む。淡黄灰色を呈し、胴部に黒斑がある。器壁の磨滅が著しく調整は不明瞭。底部と胴部の境に指圧痕がみられる。胴部に焼成後の穿孔が確認された。

次に木棺墓について述べる（Fig. 4-4）。1号木棺墓としたのは、木棺の痕跡が認められたのではない。遺構検出時に、長軸135cm、幅42cmにわたる範囲（スクリーントーンの部分）が黒色を呈して裏込めと色調を異にしており、横断面でも同様の所見が得られたことから框の痕と考えた。副葬小壺の位置から、頭位を東側と推定したい。壺の下にあるのは甕棺の破片である。

副葬小壺は、口縁部を欠損しており、胎土中に石英・長石・雲母の小粒を含むが、精良である。胴部外面に横方向の磨き、底部と胴部の境は横ナデ、他はナデ調整が施される。外面に亦

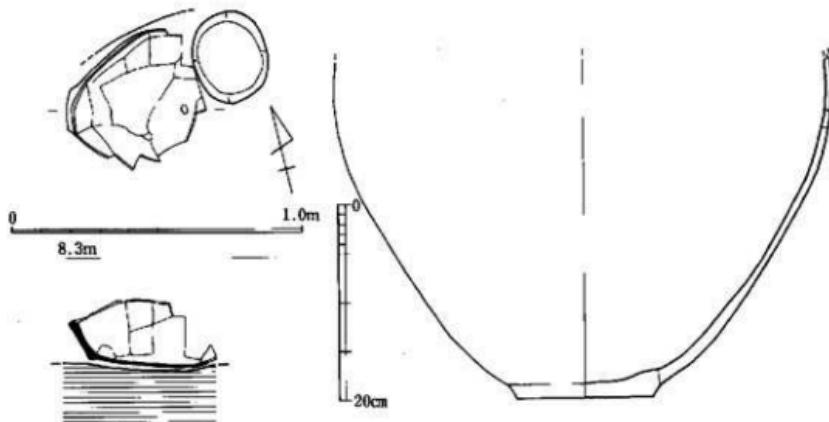


Fig. 4-3 第1号甕棺墓（縮尺 1/20）および甕窓測図（縮尺 1/6）

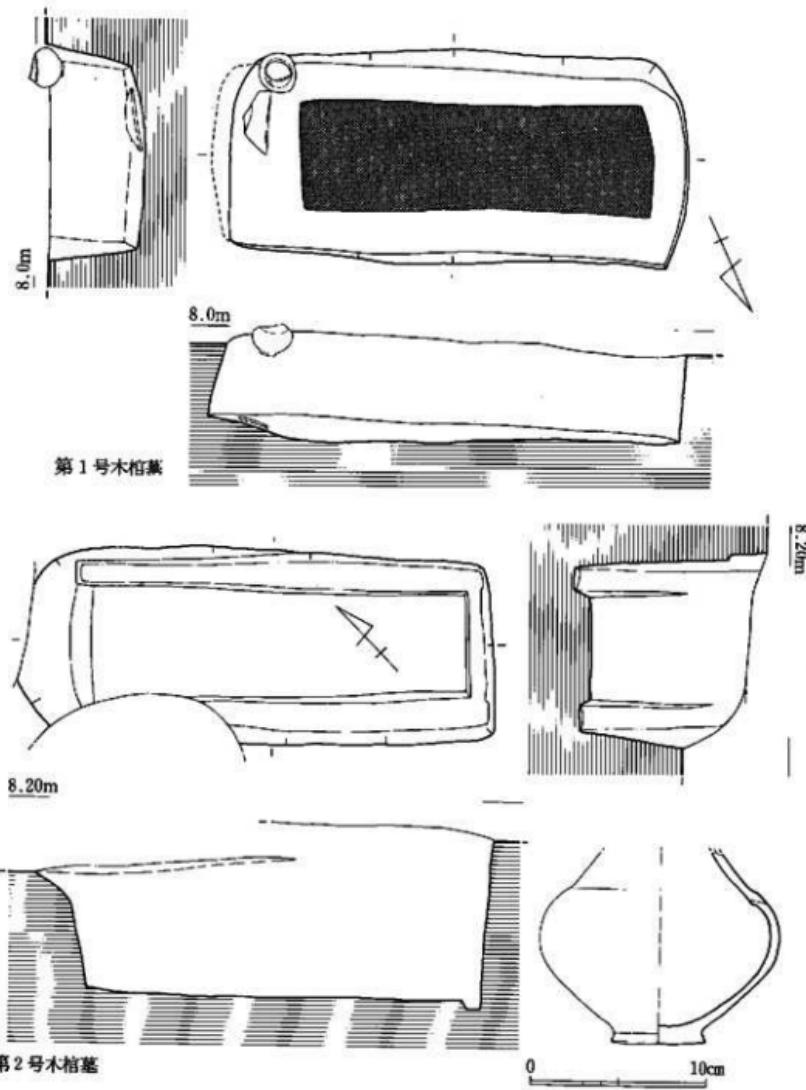


Fig. 4-4 第1・2号木棺墓実測図（縮尺 1/20）および第1号木棺墓副葬小壺実測図（縮尺 1/3）

色顔料が塗布されている。小壺の時期は、肩部と底部の部位が明瞭に分かれていることから、板付I式の特徴を備えている。この小壺は、Ia式の壺棺に副葬された場合、時期的には板付IIa式に位置づけられるものである。副葬小壺については、板付I式の特徴が同II式に受け継がれるとも理解されるわけだが、今回は、木棺墓に伴うことから、3基の壺棺に先行する時期と捉える。1号木棺墓は、裏込めに壺棺の破片も混入しており、埋葬専用棺としての大型化の時期について検討の余地がある。

2号木棺墓は、地山を裏込にして木口板を両側板で挟みこむタイプである。墓壇上面は、削平をうけているが、棺長161cm、幅65cmをはかる。棺の内法は、長軸143cm、幅約42cmをはかる。一部攪乱をうけているが、頭位は西側と推定される。副葬品をはじめ共伴遺物は伴出していない。以上、今回検出された3基の墓に、赤色顔料は認められなかったことを付記して解説を終わる。

#### 註

- (1)飛高憲雄・力武卓治「那珂沼口遺跡」「那珂深ヲサ遺跡II」所収、福岡市埋蔵文化財調査報告書第82集、福岡市教育委員会、1982年。
- (2)橋口達也「壺棺の編年的研究」「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI集中巻」、福岡県教育委員会、1979年。

#### 古墳時代の住居跡 Fig. 4-5

先述したように住居跡は切り合いが多く、先後関係も明確でない。ここでは平面プランが推定可能な3基について説明する。

1号住居跡は、一辺約4mの隅丸方形プランで、4本の支柱穴を有するタイプであろう。西側に淡青灰色の粘土がまとまっていることから、原形を留めていないが竈跡と考えられる。

2号住居跡は、隅丸方形あるいは長方形の竪穴住居跡で、東西幅3.2mをはかる。明確な支柱穴は認められなかった。北壁中央に淡青灰色の粘土が、まとまっており、1号住居跡同様に竈跡と考えている。

3号住居跡は、木の炭化物が多く検出されたもので、焼失住居跡の可能性がある。炭化物の分布から住居プランを想定したが、切り合いが多いため、隅丸方形あるいは長方形といった知見しか得られなかった。南西部に淡青灰色の粘土と焼土が確認されたので竈跡と考えている。

#### 出土遺物 Fig. 4-6

1号住居跡 1・2は壺である。1の長胴壺は頸部のくびれは明瞭でなく口縁は外湾気味に立ち上がる。胴部下半以下を欠損する。粘土中に掘えられた状態で出土した。調整は内面は縦方向の削り、外面は縦方向にハケ目を施している。2も頸部のくびれは不明瞭で口縁は外湾し端部を丸くおさめている。調整は口縁部をヨコナデ、外面にはハケ目を施している。内面には粘土の擦目がみられる。色調は黄褐色を呈し、胴部には黒斑がある。3・4は須恵器の杯身であ

る。3は外底の約1/2程回転ヘラケズリを施す。口径は12cmをはかる。外底にはヘラ記号がみられる。4は外底の約2/3程回転ヘラケズリを行い、口縁は内傾する。この他の共伴遺物には壺の取手など土師器の小片が出土している。

2号住居跡 5は土師器の鉢である。丸底で体部のやや上半で肥厚し、口縁は先細りする。胎土は砂粒を含むが細かい。調整は内外面とも底部をナデ、口縁から体部はヨコナデによる。この他に須恵器の高杯・杯・土師器の壺の細片が出土した。杯にはヘラ記号のあるものがある。3号住居跡 6・7は壺である。6は丸底で口縁はくの字に外傾する。調整は内底をナデ、体部内面から口辺部をヨコナデ、体部外面から外底にはハケ目を施している。8は体部下半以下を欠損する。器壁の磨滅が著しく調整は不明。8・9は杯である。8は丸底で胎土は砂粒を含むが密である。調整は器壁の磨滅が著しくわからない。9は平底で胴の脹りはなく口縁端部を

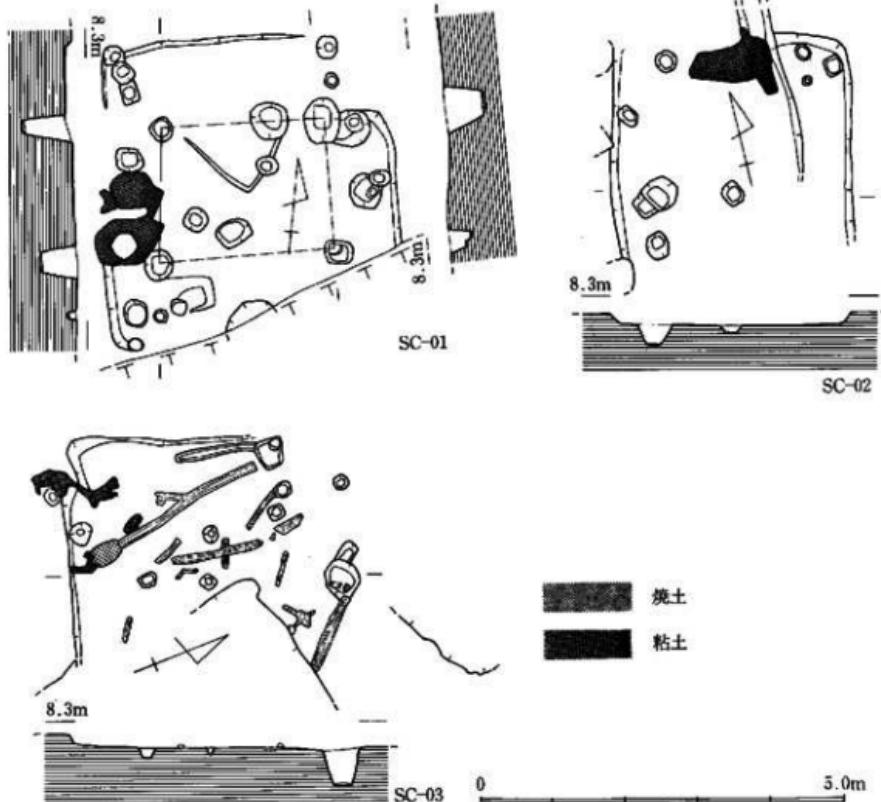


Fig. 4-5 第1・2・3号住居跡実測図 (縮尺 1/80)

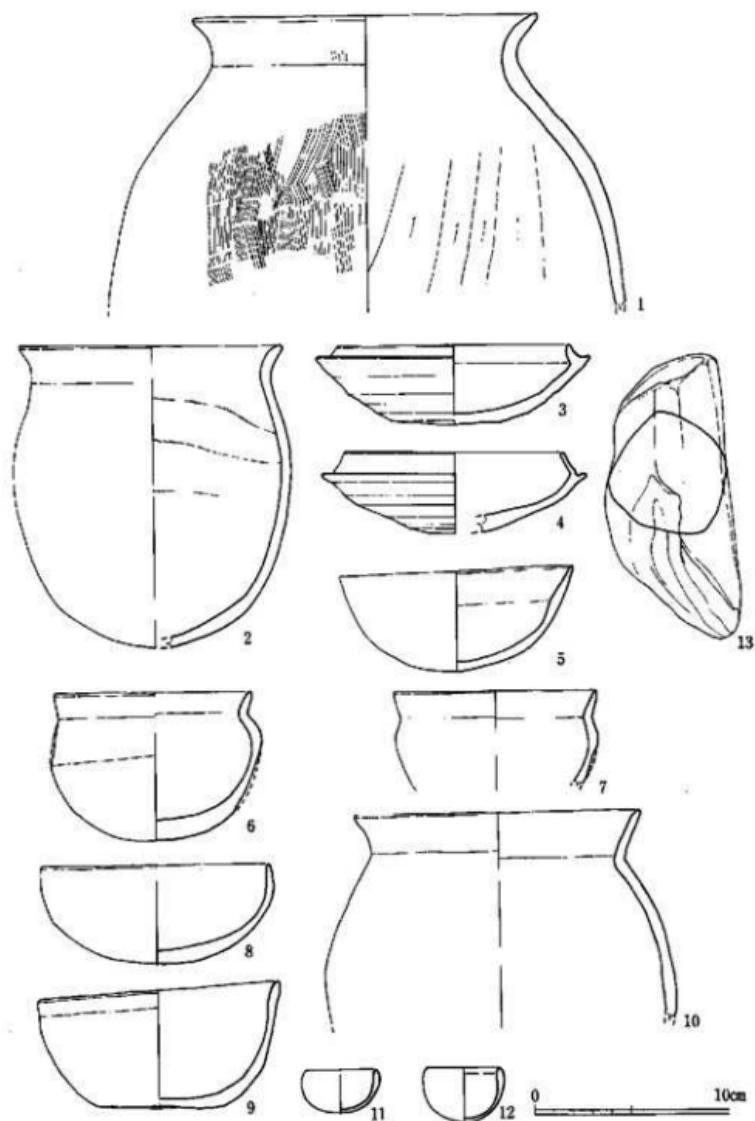


Fig. 4-6 住居跡出土土器実測図 (縮尺 1/3)

やや肥厚している。調整は内面と外底をナデ、外面と口縁部をヨコナデしていると思われる。10は壺で、体部下半以下を欠損する。調整は口辺部をナデ、内面をナデとタテ方向の削りで外側は磨滅しているためわからない。11・12は手捏ね土器である。11・12とも器底は薄く口縁を丸く仕上げている。胎土は砂粒をほとんど含まず非常に細かい。13は支脚と考えているが磨滅が著しく原形を留めていない。5の壺と同じピットより出土した。この他に石錐、須恵器杯の細片（ヘラ記号あり）等が共伴している。

その他の出土遺物 1はSC-03を切る住居跡より出土。須恵器の蓋で鉗状のつまみを持つ。天井部外面にはカキ目を施している。2～6は包含層より出土した。2～4は須恵器である。5は土師器の壺で調査区の西端より出土した。口縁は外湾し端部を丸くおさめる。頸部のくびれは不明瞭である。6は砥石。7は前出のSC-03出土の石錐である。

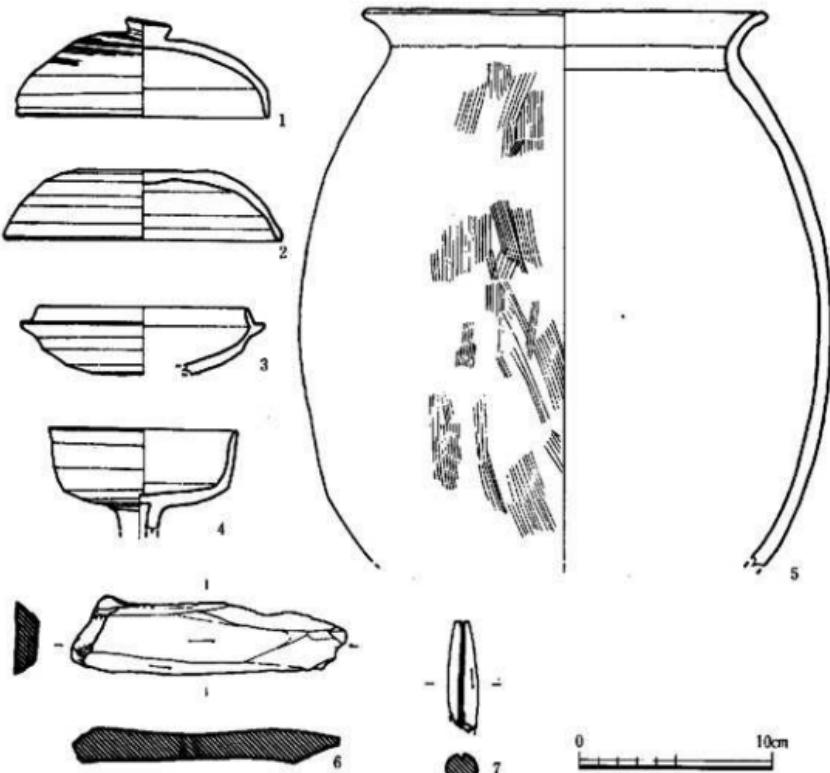


Fig. 4-7 遺物包含層ほか出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

### III 小 結

以上の調査結果から、遺跡の変遷をたどり、今後の課題を記したい。まず弥生前期には木棺墓と甕棺墓が併存する墓域であった。2基の木棺墓と3基の甕棺墓だけでの推定であるが、K-3の検出状況から考えると、1m~1.5m近く削平をうけているようである。那珂の丘陵上では、ほかに竹下三丁目のアサヒビール福岡工場内で中期の甕棺墓が調査されており、本年度報告が行なわれる。

古墳時代の住居跡は、須恵器の形式からIII b~IV期にかけて、6世紀後半から7世紀前半に比定される。集落の広がりは、周辺域にも予想され、竈の形態や支柱穴の位置を含めた住居跡の構造など明らかにすべき点も多い。

那珂遺跡群では、主要道路に面した部分を主体として、今回のような小面積の調査が一層増えることであろう。調査と資料整理体制の充実など行政に課せられた問題も少なくない。何れにしても調査の資料化を蓄積し、資料の評価を繰り返しながら遺跡の全容を明らかにしたいと思う。下図に那珂沼口遺跡出土の甕棺の図を転載したので、弥生時代の墓の項で参照されたい。

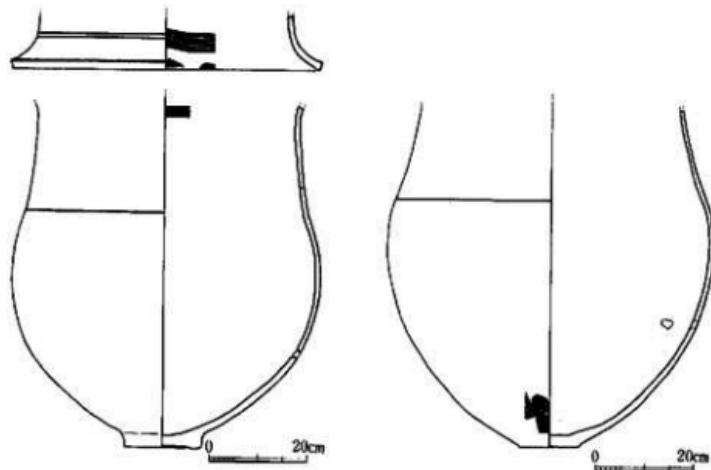


Fig. 4-8 那珂沼口遺跡出土第1・2号甕棺実測図 (縮尺 1/12)



1) 第31次調査区より西側をのぞむ



2) 発掘作業風景 (南より)



1) 第1号木棺墓（南より）



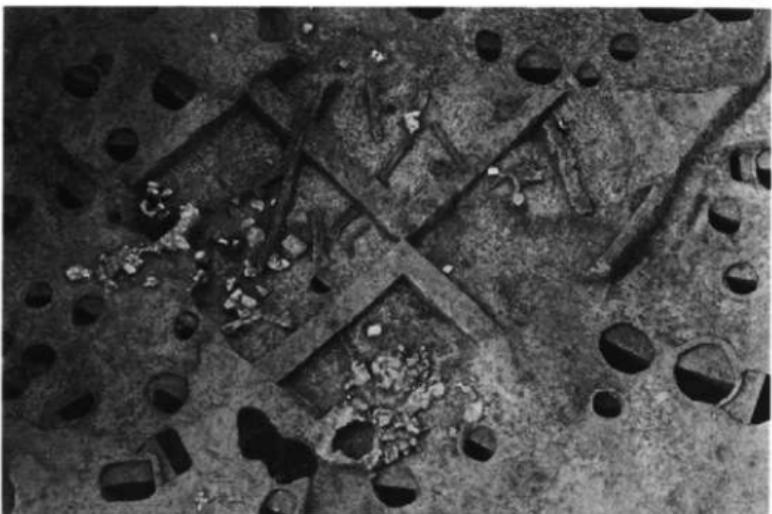
2) 第2号木棺墓（南より）



1) 第31次調査区全景 1 (南より)



2) 第31次調査区全景 2 (南より)



1) 焼失住居 (SC-03) (南より)



2) 発掘参加者



第31次調査出土遺物

那珂 6 - 第18・28・30・31次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第292集

1992年（平成4年）3月13日

発 行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印 刷 正光印刷株式会社  
福岡市中央区赤坂一丁目3番7号